
水晶魚【すいしょううお】

今西薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水晶魚【すいしょうつお】

【Nコード】

N3522T

【作者名】

今西薫

【あらすじ】

水晶魚の卵は、望む物の姿形に変えられるという。

ジェインの父親は、その水晶魚の卵をもとめて旅立ち、母もそれからすぐ、彼女が幼い頃に亡くなった。

月日が経ち彼女が10歳の時、祖父と二人きりだった生活に下宿人が参入し、見知らぬ女が祖父を訪ねてきた。それをきっかけに、物語が動きはじめた。

過去に書いた作品です。

未だ完結せずの状態ですが、1話ずつでも投稿していけたらと思っています。

1話目を投稿したあと、2話目以降を読み返していたら、残酷なシーンがありました。

多少言葉を変えたり、省いたりで対応しましたが、今後の予定にも多少影響が出そうです。

とはいえ、R18まではいかないはずなので、このままこちらで続けたいと思います。

外は吹雪だ。暗闇の中は三步ある位ただけで方向感覚を失いそう
だ。暖炉のそばの敷物の上に座ってそれを見ながらジェインはほっ
として息をつく。

「こんな日は」

傍らのマックスを見下ろしてジェインは小さく笑った。ゴールド
ンリトリバーはじつと主人をみつめる。

「お父さんのいなくなった日を思い出しちゃうね」

もう六年も昔のことだ。ジェインはまだ四歳のだった。

その時、小さな爆発音が響いた。地下室の祖父を思っ
てジェインは笑う。

「おじいちゃんも元気だよね」

マックスは、くうんと鳴いて同意を示した。

「まだ起きてたのかい？」

不意にドアが開いてダグラスが顔を出した。

足音に気づかなかつたのは、外の吹雪のせいだ。同居人を不思議
そうに見上げてジェインはうなずいた。

「おじいちゃんがまだがんばってるんです」

ダグラスはちらりと地下室へと続くドアを見やって肩をすくめる。

「じいさんも元気だな」

「お茶いれますね。そのへんに座って下さい」

「悪いね」

ジェインはいいえと首を横に振って立ち上がった。

一月前からこの家の二階に住みだしたこの男は、人に気を遣わせ
まい遣わせまいとしている。どこがとははつきりとは言えないが、
ジェインはなんとなくそう思っている。マックスの傍らに腰を下ろ
すダグラスを見やってジェインは炊事場に入った。

やかんを火にかける。偉大なる祖父の発明の成果だ。天然ガスを

利用している。

ジェインはちょっと考えて大きなカップを三つ取った。地下室の祖父にもわたして寝るように勧めよう。無駄だとは判っていたが、今はもう二人っきりの家族だ、気持ちだけは伝えておきたい。

「なんてね……」

ため息をついてジェインは小さく笑った。

「何を造ってるの？」

何やら大きな機械の上に乗っかり、スパナを持っている祖父のデイルを見上げる。

「飛行機だ」

「ひこうき？」

「空を飛ぶ機械だ」

ジェインは想像力をめ一杯使って考えてみる。ひこうき。ひこうき……。

「鳥みたいに？」

デイルはちらりとジェインの方を見て、なんだか怪しげに嬉しそうに笑った。

「風船みたいにだよ」

やはり判らない。ジェインは諦めることにした。なんにつけ、天才の考えることはよく判らないものなのだ。

「お茶、ここに置いておくね」

「すまないな」

「もう休んだ方がいいよ」

「判っている」

返事はするが、言葉通りにはしないことは判っている。ジェインはおやすみなさいと言って背を向けた。

「お前は、ダグラスのことをどう思う？」

ジェインはちょっとびっくりして振り向いた。

「びつくりした。どうしたのおじいちゃん。いきなりそんなこと」

「いや、随分となつているものだと思つてな」

「ダグラスさんは……やさしいから」

ジェインは言葉を探す。

「待つてくれるから、あたしが話すのを。……おじいちゃんとジヤックはちゃんと待つてくれるんだけど、ほかの人はそうはいかなくつて、でも、ダグラスさんは違つて……」

物心ついた時には祖父と二人きりで町から離れたこの家に住んでいた。めつたに人のこないところで暮らしていたせいか、ジェインは人が苦手だ。学校に行くようになってもしかばらくは友達もできずにいて、友達ができるまでに一年くらいかかったものだ。今でこそ町の人にも挨拶はできるが、それでも知らない人はやはり苦手だ。だが、ダグラスは初めて会つた時から違つていたのだ。

「でも……どうしてそんなこと聞くの？」

「私も気に入っているからな」

「え？」

「いや……。お茶が冷めてしまうからもう行きなさい。私ももう寝るから、ジェインももうやすみなさい」

ジェインは口をひらきかけてやめた。祖父はもうこちらを向いていない。なにも答えるつもりがないということだ。

「うん。おやすみなさい」

ダグラスとマックスは暖炉の前に座つていた。どちらも考え込んでいるように見えて、声をかけるのがはばかられたジェインは黙つてその横に座つた。

「じいさんはまだするつて？」

気づいたダグラスが聞いてくる。ジェインは小さくうなずいた。

「ひこうき、造つてるんだつて」

「ひ……ひこうき、ねえ」

ダグラスはなにやら知っているようだ。

「風船みたいだって言ってたんですけど」

確認するように言うと彼は顔をしかめた。

「そりゃ、また……。まあ、そういうのを言わない事もないが……」
「ダグラスさんは物知りなんですな。おじいちゃんってば、教えてくれるのはいいんだけど、説明してくれないから結局何だか判らないの」

「確かにそうだよな、あのじいさんは」

床に置いたトレイからカップを取ってダグラスは口に運んだ。

「ジェイン、君ももっとくいさがって聞けばいいんだよ」

「うん。そう思っただけど……」

ジェインはうつむく。簡単にはいかない。しようと思っても体が動かない。そんな自分がくやしい。

「…むずかしく考えることはないさ。思ってるより簡単なことだよ。やってみるとね、わかるんだ」

ジェインはくすくすと笑ってみせた。おどけた表情のダグラスは安心したようにかすかに瞳の色をゆるませた。それに気がついた。

「がんばらなくちゃね」

自分に言い聞かせるように言ってみる。

がんばらなくちゃね。

なんだか、本当にがんばれるような気がしてくるから不思議だ。

「がんばろうな」

ぼんと頭に手を乗せられる。まるっきりの子供あつかいにジェインは淋しさを覚えながら、うなずいた。

時計の針が十一時を指し、鳩が十一回鳴いた。外はまだ吹雪だ。

この様子では朝まで止みはしないだろう。

「すごい雪だな」

ジェインの視線を追ってダグラスは外を見た。たった一枚の壁を

隔てただけで外と中はこうも違う。たった三時間車を走らせただけで、こうも違う。驚かされたのはこれが初めてではない。空気の澄み方、人々の温かさ、緑の鮮やかさ。花が咲き、鳥が歌い、虫が飛び、季節を知らせる。たった三時間だ。半日もかからない。

「……こんなのは、めったにないんですよ」

「それでも、街ではこんなには積もらない。雪なんて見るのはもう何年ぶりかな」

目を細めてダグラスは言う。

「街では降らないんですか？」

「そうじゃないんだけどね。少ないんだ。夜のうちに積もっても次の日の朝のうちにはもう溶けてしまっ」

「温かいんですね」

ダグラスはちらりとジェインのことを見て口許で笑った。

「そうだね」

ジェインはふと口をつぐんだ。まずいことを言ったのかなとダグラスをみつめる。黙りこんだ彼は気づかずに暖炉の火をみつめている。唐突に訪れた沈黙はジェインには重すぎた。重すぎて耐えられなくて、ジェインは口を開いた。

「さつきね、マックスに言ってたんです。こんな日はお父さんのいなくなつた時のことを思い出すねって」

唐突な沈黙をジェインが唐突に破り、我に返つたダグラスが目を丸くするのもかまわずにジェインは言葉を続けた。

「こんな日だったんです。冬の、雪の降る日。風がきつくて、お父さんは夜なのに出ていって。あたしはまだ小さかったから、よく判らなくなつて」

「お父さん？」

ジェインはうなずいた。

「四歳の頃です。水晶魚を探しに行ったんだと思います。それつきり、未だに帰ってこないんです」

目をつむるまでもなく思い出せるその光景を昔は持て余していた。

今は？ と自分に問いかけてジェインは変わってないことに気付く。
今でも持て余している。

「水晶魚？」

「水晶でできた魚なんだそうです」

「…………… それを取りに行ったの？」

いぶかしげに、探るようにダグラスは言った。

ジェインは首を横に振った。

「水晶魚は一年にたった一つだけ卵を産むってお父さんは言ってます。水晶魚の卵は親の望む形に変わってくれるから、取っても意味はないんです。お願いしなくちゃいけないんだってお父さんは言っていました」

「お願いって？」

「分けてもらうんだそうです」

「お願い、して？」

ダグラスは信じられないといった顔でジェインを見ていた。ジェインはうなずいた。

「一年に一度、一個しか産まない卵の形を決められるのは水晶魚だけだから」

水晶魚が心動かされた人だけが願いがかなえられるんだよ。

父親の言葉をジェインは思い出す。

「盗んでも役にはたたないってわけか……………」

「溶けちゃうんです。……………でも、水晶魚の住んでいる谷は遠くて険しいところだから、めったに人がたどりつくことはできなくて、卵も魚になれたとしてもなかなか育たないから水晶魚は一つがいしかいなくて、願い事をかなえてもらうことなんてそうないことらしいんですけど」

ダグラスはつられたように軽く笑った。

「その方がいいのかもしれないね」

ジェインはうなずいた。

「あたしもそう思います」

地下室のドアが開いた。

祖父が顔を出した。

「まだ起きてたのか」

「あ、もう寝るところ。おじいちゃんは終わったの？」

「誰に頼まれたことでもないからな」

ぶっきらぼうな物言いに、どうやら上手くいかないらしいと想像できる。

「……もうお休み。明日も朝が早いんだろっ？」

「あ、うん」

ジェインは立ち上がるとマックスも立ち上がり足下にピッタリとくっついた。

「おやすみなさい。ダグラスさん、おじいちゃん。カップはそこに置いていてね」

「ああ、おやすみ」

「おやすみ」

ジェインは身をひるがえして階段を上っていった。

その足音が聞こえなくなるとダグラスが溜息をついた。

「何か用ですか」

「そう身構えなくてもいい」

めずらしく真剣な顔のデイルを見てダグラスは色々考えを巡らせてみる。

「ジェインを下がらせてまでするような話となるとやっぱりね」

「大したことではないよ。いても構わんが、いない方があんたのためだと思ったんだ」

ドアを閉め、部屋の中に入ってくると、デイルはダグラスの向かいに腰をおろした。

「あれは、父親の話をしただろっ」

「しました……けど？」

「水晶魚のことも話したな」

ふいにダグラスは嫌な予感がした。

「話しましたけど」

デイルはしばらくじっとダグラスの顔を見ていたが深く溜息をついた。

「ジェインをもらってやってくれ」

ぼつりとひとり言のようにデイルは言った。

「……は？」

「ジェインを嫁に貰ってやってくれ。冗談ではないぞ」

冗談ではないと言うならなんなのだろう。ダグラスは目の前にいる老人の言葉の真意をはかりかねてただただ黙っていた。

「わたしももう年だ。いつぼつくりいくとも限らん。そんなことは怖くはないが、母親も父親もないあの子のことだけが心配だったんだよ。でも、あんたがいれば安心だ」

「勝手に安心しないでくれませんか？」

ダグラスは溜息をつきながら言った。

「俺をいくつだと思ってるんですか。ジェインは十歳ですよ、まだ

！ いくらなんでも」

「年齢など関係ないよ」

「彼女の気持ちはどうするんですか！」

「さつき聞いたたら、あれもまんざらでもなさそうだ」

「それは今の話でしょう。何度も言いますが、ジェインはまだ十歳ですよ。この先、好きな男ができることだってある。彼女の人生を決めるのは彼女だ」

「いや、おまえさんほどの男はいない」

きつぱりとデイルは言った。褒められて悪い気はしないダグラスも、その根拠は一体どこにあるのかとか、そういう問題ではないと、か言いたいことはあるのだが、あまりにも呆れて物も言えない。

「よし。決まりだ」

ダグラスは口を開きかけてやめた。何を言っても今は無駄のよう

だ。

階下から祖父の大笑いが聞こえてきた。ベッドの中に入ろうとしていたジェインは付き合わされるダグラスのことと、明日の片付けのことと祖父の体のことを考えて思わず溜息をついた。酒を飲みだしたようだ。

祖父がどんな話を聞かせたくなかったのか知りたくないわけではないが、くいさがってまで聞くほどのことではない。臆病者と自分を罵ってみても事態は変わらない。ジェインにも判ってはいるのだ。そんなことは。

「おやすみマックス」

ベッドの足下に座り込むマックスにあいさつをすると、ランプの火を消して目をつむった。

「お父さんが生きて帰ってきますように……」。

思いついて祈ってみる。昔父親から聞いた話では、旅人は卵を貰えて、望みもかかったという。父親もそうであって欲しいとジェインは思う。帰ってきて欲しいと思わずにはいられない。

「おやすみなさい。」

そう呟いて、ジェインは目をつむった。

ジェインはやかんを火にかける。いつもならそろそろ朝食の支度をはじめなければならぬのだが、昨日の騒ぎの規模ならば、祖父も同居人もあと二時間は起きてはこないはずだ。その二時間をどう過ごそうか考えならテーブルにつき、窓の外を眺める。昨晚の吹雪が嘘のようだ。きらきらと光って美しい世界はまぶしくて。

- 水晶ってこんなのかな。

ジェインはそんなふうを考えてみる。昨夜ダグラスに話したせいだ。

思い返して赤面する。なぜ話す気になったのだろう。父親のことは家の中で禁句だった。父親のことと母親のこと。

母はとても美しい人だった。ジェインはそう記憶している。長い髪を一つにまとめ、ゆっくりと室内を歩いていた。目のみえない人だった。街で母とであった父はそれでも母を妻にとのぞんだ。生活していくだけならと田舎にひっこみつましく暮らしていた。六年前、父は旅に出た。母の目を見えるようにするためだと祖父から聞いたのは、半年後のことで、母も行方不明になつてからだった。それ以来、父と母のことを祖父から聞いたことはない。そしてジェインからも話したことはないのだ。

小さく息をつき、ジェインは気持ち切りかえる。湯が沸いた。とりあえずお茶でも入れて飲み終わったら掃除でもはじめよう。

「っはよーさんっ」

立ち上がると同時にぱたんと音がしたのと同時に声が響いた。

「ジェイン、どこだー？ おっ、マックス元気そーじゃん。あ、炊事場か。おっはよー、じいさんはどこだ？」

「え……えつと……」

炊事場の入口に姿を現した雪まみれの赤毛の少年は横にマックスをつれてにかつと笑った。隣の家に住んでいる同じ年の少年のジャ

ツクだ。隣といつても、丘を一つ越えたところだが。

ジェインはどの質問に答えていいのか少し悩んで、とりあえず朝の挨拶をした。

「おはよう」

「おう。じいさんは？」

「まだ、眠つてると思つ」

「ふうん。あ、茶だろ？ 俺も飲む」

「うん。……クッキー食べる？」

「おう」

どかっとな椅子に座った少年にとりあえず戸棚からクッキーを出す。「じいさん、まだ寝てんの？ 遅いんじゃない？ いつもとくらべてさ」

「昨日の夜、ダグラスさんと飲んじゃつて」

「酒？ いつまでだよ。お、サンキュ。……もう八時だぜ？」

「たぶん、あと一時間半ぐらいは。……どうしたの？ こんな朝早く。日曜日に」

ポットにお茶の葉を入れ、湯をそそぐ。蒸らしている間にカップを用意して、ついでにマックスにクッキーを一枚与えて、ジェインも椅子に座る。月曜日から金曜日は村の学校へ行っている彼は、土曜日になると午後から祖父に機械いじりを教わりにやつてる。土曜日に来られない時には日曜に来ることもあるが、昨日はいつも通りにやつて来たのだ。なにか急用なのだろうかと不安になる。

「うん、昨日、うちに女の子の人が泊まりにきてさ、その人がじいさんに会いたいつて言ってるんだ。でも、この雪だろ？ じいさんの車を出してもらった方が早いからさ」

つまり呼びにきたというわけだ。

祖父の造った車はとも丈夫で、雪道だろうがなんだろうがおかまいなしにつき進む。それをあてにしてきたらしい。

「……どうする？ 多分、今起こすと、もつのすごーく不機嫌になると思うんだけど」

「うーん。そっだよなあ……」

ジャックは腕くみをしてうなる。

「起きるまで待つてると昼だよな？ とすると、それまで待つてもらわないといけないってことで。え？ じゃあ俺、この雪ん中も一度家まで帰らないといけないって？ げっ」

心底嫌そうな顔をしてジャックは茶を一口飲む。

「あの車だよな、やつぱり……」

「うん。ま、そーじゃなくても時間がかかるって連絡できたらいいんだけどさ」

ジャックはさらにうなる。ジェインはしばらくそれを見つめておもむろに口を開いた。

「マックスに行かせようか？」

「え？」

「マックスだったらジャックの家、知ってるし、雪の中も平気だし」

「いーのか？」

ジャックは信じられないというように身を乗り出した。

名前を呼ばれたゴールデンリトリバーは、まっすぐに主人を見ている。ジェインは逆に不思議そうに首を傾けた。

「いいけど？」

言った彼女の顔がわずかに上がり、笑顔から不安そうな顔へと変わったのを見て、ジャックは振り返った。

「ジェイン、悪いが水をくれないか？」

寝巻姿のぼさぼさ頭の男は、まだ眠そうな顔で片手でこめかみをおさえて立っている。

「あ……はい」

慌てて、ジェインは水を入れに行く。

あからさまに顔をしかめたジャックは睨むようにダグラスを見る。

「色男も二日酔いじゃ形無しだな」

「おまえ、トゲありすぎ。ガキまるだし。ってか、何でいるんだ？」

「二日酔いのくせに無理すんじゃないよ。うちの宿の用事だよ」

ダグラスはジャックのそのセリフに一瞬顔をしかめたが返事もせずにテーブルについた。

「ダグラスさん、はい」

水を受け取って飲むとダグラスはうなった。

「大丈夫ですか？」

「自業自得だよ、ほっときやなおるって、病気じゃないんだからさ」
不機嫌に言うジャックに、ジェインは顔をしかめる。

「あー、ジェイン、気にしないで。こいつ、俺のことが好きなんだよ。だからつつかかるの」

気配を察したのか、うつむいたまままでダグラスは軽く手を挙げた。
「ちがうっ」

真っ赤になつてジャックが叫ぶと、ダグラスが耳をふさいでテーブルに伏す。

「ジャック、もう少し静かに……」

はらはらしながらジェインが口をはさむ。

「けっ。口の減らねーおっさんだぜ」

「……もおっ」

呆れたように、悲しげに頬を膨らます。思えばこの二人は出会った頃から仲が悪い。どちらかといえばジャックが一方的につつかかり、ダグラスがそれをからかっているのだが。一度祖父に相談したのだが、祖父は笑って相手にもしなかったのだ。

「じいさんは、まだ寝てる？」

テーブルに伏したまま、ダグラスが静かに言った。

「まだ、起きてきていません」

「そうか……」

ほとんど死にそうな声で返事をしたまま、沈黙が訪れる。

ジャックとジェインは顔を見合わせ、ジャックが肩をすくめた。

「あ、紙とペン。手紙、書くから」

「……おい少年。どこか行くのか」

「違うよ。……どこにつけるのがいい？ 首輪だとうちの家族、気

づかないかもよ?」

「袋をぶら下げるのは? 目立つし」

「マックスをどこかにやるのか?」

唐突にダグラスが振り向いた。急に起き上がった彼は頭痛に呻いている。

「うるさいよ、おっさん。静かに寝てるよ」

「うるさい。そうじゃない。じいさんを見てこい」

思い切り不機嫌な声になってダグラスが言う。二人は少しひるんだ。

「なんだよ」

「いいから。ジャック、じいさんを見てこい」

頭を抱えこむようにしてうつむいているダグラスの背を二人は見つめる。

「早くしろ。 - ジェイン、マックスから離れるな。それから、水をもう一杯くれ」

「 - はい」

言われてジェインはすぐに動いたがジャックは伏したままのダグラスを驚いたように見ていた。

「早く」

急かされてジャックは苛立たし気に炊事場から出ていった。

「どういうことですか」

水をわたしながらジェインが尋ねた。

「 - 気のせいならいいんだ」

沈黙の後、ダグラスはその一言だけを発した。訳がわからないまま、ジェインはすり寄ってきたマックスの首に手を置き、ダグラスを見つめていた。

ジェインをもらってくれと、ディルに言われた時に、本当なら気づくべきだったのだ。田舎で長年暮らしているわりに正確な知識と

とんでもない技術をもっている少女の祖父は、酒の席でそんなバカげたことを言いだすほどにせっぱつまっていたのだと気づいたのは泥酔の半歩手前だ。気づいた時には既に遅く、目が覚めたら朝だ。頭痛がするのをいまいましく思いながらダグラスは水を飲む。冗談じやないというのが心の底からの気持ちだ。デイルにはデイルの事情があるとしても、やり方というものがあると思う。

いつもならいるはずのない少年の家が宿屋でさえなければ、あるいは昨日の夜見かけない女が村にやってきたという話を耳にしなれば、その女の容姿をめずらしくデイルが気にしさえしなければ、おそらくこんな推理はしなかっただろう。デイルが孫娘を自分にくそつとしているだろうとは。

- - だが、どういうことだ……？

推測の域を出ていない考えは、二日酔いの頭の中ではまとまらない。ジャックがやってきた理由と、マックスを外に出そうとしている二人と。

「おいおっさんっ。じいさんがいないっ」

どたばたと足音が響いて、ジャックが現れる。

- - じいさんがいなくなつた理由と……。

関係ありそうな事柄の一つに加えながら、頭痛に顔をしかめ、ダグラスは体を起こす。

「二階は？ ジェインをつれて一緒に探してこい」

つとめて冷静に言ってダグラスはジェインを見つめる。

「マックスを連れて、二階を探してきてくれないか？」

「あ……はい」

気押されたようにジェインが歩き、その後をついて行きかけたマックスの垂れた耳が少し持ち上がる。二階へ上がろうとジャックが体の向きを変えたとき、扉が開く音がした。

炊事場の入口の所でジェインは立ち止まり、出入口の方を見つめた。反射的に立ち上がり、立ちすくむ二人の所にたどりつくくとダグラスにもその理由がわかった。

若い女がいた。

開け放された戸口に長い髪を揺らして仁王立ちになっている。逆光で顔は見えないが、二十歳前後のようだ。昨日この村にやってきて、ジャックの家に泊まったのは彼女だろうと容易に想像できた。

「博士に会いたい」

息が荒い。雪の中を歩いて来たのだろう。濡れた長めのスカートの裾が重そうに見える。

「誰だ」

壁に手をついて体重を支え、ダグラスは女の質問に答えずそう尋ねた。

「・・・博士はいないのか」

女の声にわずかな苛立ちが感じられた。だが、とダグラスは気づいた。女は自分の方を見てはいなかった。

視線の先にはジェインがいた。

「ジェイン、ジャック、中に入れ。この人とは俺が話す」

ダグラスは女から視線をはずさず言った。ジェインが怯えているように見えて、軽く肩を叩いて促す。我に返ったジェインは小さくうなずいてそつとあとじさった。女の視線はジェインを追ってゆく姿が見えなくなった処でようやくダグラスの方を見た。――ようだった。

「誰だ」

「おまえに用はない」

「俺にも用はないが、名前を名乗らないような奴の質問に答える気はないんだ」

「――名乗ったところで、おまえには判らないだろう。わたしは博士に会いたただけだ。いないのなら、ここには用はない」

「そうか。なら、ここにはいない。心当たりもない。そっちの戸を開ければ部屋だが、探したけりゃ、探すがいい。じいさんのことは俺も一発殴つてやりたいところだ」

ダグラスは慎重に、淡々とそう言う。怒りは頂点まできていたがこの程度の皮肉で抑えられたのは奇跡に等しい。

女は入口に寄り掛かるようにして腕をくんだ。

「博士はいい用心棒を雇ったようだな。――二日酔いか？ 酒くさいな」

「俺は雇われてはいない」

「――そうは思っていないのに？」

女の口許が笑みを刻む。

「生憎と、見ず知らずのあんたに、正直な気持ちを告げなければならぬ義理はない」

「それはそのまま、肯定ともとれるな」

「どちらとでも」

そこで会話はとぎれた。女は何を望んでいるのか、薄笑いを浮かべたまま、入口から動かない。いつの間にか暖炉の火も消え、気温はかなり下がっている。

どうするか、と意識をじっと黙っている二人に向けたときだった。小さなくしゃみが聞こえた。ジェインだった。

次の瞬間女が動いた。中に入って戸を閉めた。

「 - - 悪かった。探させてもらう」

中に入るとその容姿がはつきりと判った。薄い金色の髪と氷のような薄い青い色の瞳と透き通るような白い肌が、とりわけ美人という顔立ちでもないのに女を美しくみせていた。落ちついたというよりは度胸の据わった物言いと態度がなければ十七、八歳に見える。女はゆっくりと、迷わず炊事場の向かいの戸に向かい扉を開けた。いないことを確認するように首をめぐらせる。振り返った女は苦笑した。

「そう、緊張することはない。博士以外には用はない」

「信用はできないな」

「まあ、そうだな」

女は暖炉の横の戸に手をかける。地下室への扉を女は開けて、ためらわずに降りてゆく。その姿が見えなくなったところで、ダグラスは振り返った。

「寒くないかい」

ジェインは青い顔のまま、不安そうな顔のまま、左右に首を振る。

「ダグラスさんこそ、大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ、おっさんなら」

不機嫌にジャケットが言う。

「椅子にでも、座っているといい」

苦笑してそれだけ言うと、ダグラスは注意をまた、女の方に向けた。

女はまだ出て来なかった。遅いなと口の中で呟く。地下室は、階

段を降りてもう一枚ある扉を開けたところにある。大人の背丈の二倍ぐらいはある高さでかなり広いが、一部屋しかない。今は中央には気球が、壁にそって作りかけの発明品が置いてあるが、どこにも隠れるようなところはない。探すのに手間取っている理由が判らない。

しばらくして女が上がってきたが、その表情に特に変化は見られなかった。女は扉を閉めると階段に目を向けそちらに向かった。

足音が階段を登り切ったと判断したところで、ジャックが自分の上着を脱いでジェインに差し出した。

「これ、着てる」

「え？ いいよ。ジャックがカゼをひいちゃう」

「俺は大丈夫だから」

ぶつきらぼうに言う。その様子を見ていたダグラスは苦笑した。

「ジェイン、せっかくジャックが言ってるんだ。いまのうちに受け取つとかなないと、いつ取り返されるか判らないぞ」

「誰がするかよ」

ジャックはあくまでも不機嫌だ。

「でも……」

ためらうジェインにダグラスは妙に真剣な表情を向けた。

「男が、わざわざ申し出てくれる時っていうのは、カッコつけたい時なんだからおとなしく受け取つとけばいいってことだよ」

ジャックは赤くなつて無理やり上着を押しつける。まだまだガキだなあと微笑ましく思いながらジェインを見ると、そちらは目を丸くして首を傾けている。可哀相にとダグラスは思わずにはいられない。

「おい、おっさん」

「なんだよ、ぼうず」

同情を禁じえないままダグラスは返事をする。

「てめーには優しさとか、思いやりってーもんはねーのかよ」

「……ぼうず。気づいてないのか？ 俺はこれでも人を見る目があ

る。誰かれかまわず優しさを振りまいてたら大安売りになるだろう。だからな、ぼーず。たまたま自分に優しさが向けられないからって、人のせいにするんじゃない」

「……な！」

「ぷっ」

ジャックの上着を抱き抱えたままジェインが笑う。ようやく空気が和んだ。

ダグラスは安心し、階上の気配をうかがった。どこもかしこも人の隠れる隙間などない部屋ばかりだ。そう長くはかからないだろう。残る部屋はそうするとここしかない。

「ジャック、火をおこそう。寒くてかなわん。ジェインも、暖炉のそばに移動だ」

「- -おい、おっさん」

ジャックが慌てて声をあげる。

「ま、大丈夫だろう」

軽く言っつて、二階の様子をうかがう。降りてきた女がここに入ってきて入れ替わるより、先に出ていたほうがましだろう。

「じいさんはいなかったんだろ？」

確認をとりながら、ダグラスは動きだす。

「ああ」

「なら、大丈夫だろう」

「どうして」

「それくらい、自分で考えろ」

ジェインはそつと息を吐く。その様子に気づいたのはマックスだけだった。澁々火をおこしにいくジャックの後を追いながら、思い出す。ダグラスが気づいて中に入れてくれるまで、あの女の人が見ていたのは自分だったことを。色の薄いガラス玉みたいな瞳。恐いとは思わなかったが、何故自分を見ているのだらうと不思議に思っ

た。あれはどういう意味だったんだろうと思う。

「ジェイン？」

呼ばれて我に返るまで、自分が薪をじっとみつめていたことに気づかなかった。

「どうしたの？」

「ううん、ごめんなさい」

つみ重ねられた木と、マッチを持ったジャックと丸められた紙くずと。準備の整った様子を見て首を横に振る。最後の薪をわたして膝を抱くようにして火がおきるのを待つ。いぶかしそうに見ていたジャックもあきらめて火をつけた。紙屑は簡単に燃え上がった。その火は積み重ねられた薪の下に置いてある紙に燃え移り、やがて木にも火が移った。

「いないらしい」

いつの間にか降りてきたらしい女が苦笑するような声で言った。

ジェインは驚く。女のことはずっかり忘れていたのだ。

「言った通りだろう？」

ダグラスは視線を返してそう言った。

「きれいなひとだな……」

ジェインは二人を見てそう思う。腰までの金色の髪。薄い青い色の瞳。すき通るような白い肌。そして、それらすべてを際立たせる獣のような雰囲気。野生の動物とはまた違う、したたかな美しさ。粗末な着物を身につけていてさえもその美しさは隠せない。そんなふうを考えて、ジェインは否定した。そうではない。粗末な着物だからこそ際立つ美しさなのだ。

「そうだな。どこへ行ったか見当もつかないか？」

女は階段の横の壁に背をもたせかける。腕組みをして、ダグラスに問いかける。期待はしていないような調子だった。

「言う義理はないが？」

「そうだな」

女は思案しているようだった。

ダグラスはそんな女を試すように見つめている。

ジェインは事態が飲み込めずに混乱していた。はじめから、マックスを遣いに出そうとした時から、どうもおかしくなった。それは判っている。変だと思っただ直後に女が現れた。まっすぐに自分に向けられる視線が不思議で、ダグラスが何故か警戒しているようにみえて、ジェインは悪い状況なのだと思っただ。実際のところは、何がなんだかまったく判っていない。突然やってきたこの女がなにをしたのか、何故ダグラスが警戒しているのか、まるで判らない。

女はそんなジェインの思考を遮るように、壁から体を離れた。

「邪魔をした」

目の前を横切ってゆく女の姿を追う。このまま帰ってしまったもいいのだろうか。どうしたらよいのか判らなくて、ジェインはダグラスの方を見る。

「どこへ？」

ダグラスの視線は女へと向けられていた。ただまっすぐに出入口に向かっていった女は、振り返りもせず止まりもせず「教える必要はない」と言った。

「……じゃあ、じいさんはどこへ行っただ？ - さっき行方を尋ねたのは確認のためか。……知ってるんだろ？ じいさんがいなくなつた理由と、行き先をさ」

「知っているのなら、バカな質問などするわけがない」

「芝居だつたとも考えられる」

「騙すための？」

立ち止まり、振り返つた女は薄く笑う。

「残念ながら、博士の行方は判らない。博士に会えないのなら、わたしはわたしの用事を済ませるだけだ」

「用事、ねえ……」

ダグラスは品定めでもするように女の顔を眺めた。

「じゃあ質問だ。どんな用事なんだい？」

「答えなければならぬ義理はないな」

「答えられないとはつきりと言ったらどうだい？」

「答えられないな」

あっさりとなんなふうに戻す女を楽しそうに見る。

「正直だねえ。おじさんは、そーゆーのは好きなんだけどねえ」

「そうか？ わたしは嫌いだが？ 意見が合わないようだな」

「ああ、そうだな。けど、俺は本当に気に入ったよ。いい根性をしている。ご褒美をあげたくなくなってしまっうな」

ダグラスは女からジェインに視線を移す。

「……ジェインお茶を入れてくれ。そちらのお嬢さんにご馳走してあげよう」

ジェインは驚く。ダグラスを見つめると彼は大丈夫だよというように目で笑う。

「必要ない。わたしは帰る」

「そう言っなよ。じいさんはもう少ししたら帰ってくるんだからさ」「え？」

声をあげたのはジェインだった。

「待ってたらいい。じいさんに用があるんだらう？」

「……そちらのお嬢さんは驚いているようだが？」

「そりゃあね。じいさんたってのお願いだからね」

「ダグラスさん。どういことですか？」

「……ジェイン。じいさんはね、俺に頼みごとをしたんだよ。昨日の夜ね」

思い当たるふしはあった。わざわざ席をはずさせた酒盛りの直前のこと。

「今日やって来る客人にはいないと言えとね。それであきらめて帰るようならその客はほっつておいていいってさ」

ジェインは首を傾げる。その程度の頼み事でわざわざ席をはずさせるだらうか。

「敵を欺くにはまず味方からっていうだろ？」

ジェインの疑問に答えるようにダグラスは言う。

「……なんでも、よほどの用事らしくってさ。断りきれなかったんだよ」

「……では、待たせてもらおうか」

女は、仕方ないというようにそう言った。

「昼までには帰ってくるんだろっな？ ……昼になっても帰ってこないようなら諦める」

「……いいのかい？」

「ああ。今日の夜には、次の村に着いていたい。ゆっくりはしてられないんだ」

女はうすく笑ってみせるとジェインをみつめた。

「もう少し邪魔をする」

つられたようにジェインもうなずいた。

さてどうするかと、ダグラスは考える。女は何か知っているとかンが告げていた。だから、もう少ししたら帰ってくるかと嘘をついたのだった。もしそれを振り切つてまで出ていくというのなら、いないと知っているということだと問い詰められたのだが、どうやら女はなかなか頭の回転がいいらしい。このまま昼まで待つて帰つてこなかつたら引き止める手段はなくなつてしまう。

- - 打つ手はなし、か。

ダグラスは心の中で呟く。あまりにも情報が少なすぎた。

ジェインはお茶を入れ、クッキーまでも添えて、居間にいる女に持つていく。その不安そうな表情は変わらない。そうだろうと思う。自分のしたことは、あまりにも説明不足だ。だが、今、一から説明することは、女に、デイルの不在を知らせるようなものだ。

「おい、おっさん」

テーブルの上に乗るようになつこつでジャックは身を乗り出してくる。あくまでも小さな声で。

「どういふことだよ」

「なにがだ？」

ダグラスはテーブルの上に乗せられたクッキーを一つつまむ。

「俺は、そんなにバカじゃないんだぞ」

ジャックは真剣な表情だ。だが、時と場所をわきまえてはいない。

「……充分バカだ」

「おまえな」

「年上に向かつてその口のききようはなんだ。お母さんは悲しいぞ」
「誰がおまえの息子だよ！」

「声がでかい」

ジャックは慌てて居間の方を振り返る。驚いたようにこちらを見ているジェインと目があってしまい、背を向け、真っ赤になりなが

ら、小声で「ふざけるなよ」などと言うが迫力が伴わない。

「じいさんは帰ってくるんだろうな」

「あと十五分か。それで判るだろう」

あと少しで一時だ。さすがに、それ以上は女も待ちはしないだろう。

「不服そうだな。昼までに帰ってくると言っていたじいさんが帰ってこない。だからといって俺を責めてもらっちゃ困るんだよ。じいさんにはじいさんの都合がある。この雪だ、予定が大幅に狂うこともあるだろう。判断するのは、あちらのお嬢さんだ」

「そういうことだな」

女が炊事場の入口に立っていた。

「あと十五分あるが、諦めるか」

「博士にどういふ事情があるか知らないが、もうそろそろ行かなくてはならないようだ」

「じいさんに伝言はないか？ 伝えておくよ」

女は微かに表情をあらためた。

「――体に気をつけて、と。健康がなによりだから」

「判った。伝えておくよ」

「ありがとう」

女はコートの前をしめながら体の向きをかえ、その動きを止めた。

次の瞬間、扉が勢いよく開かれた。

「え？」

女は、驚いて入口の方を見るジェインの腕をいきなりつかんでひっぱり、炊事場に押し込むと駆けだした。

入口にいたのは男二人で、二人とも右手に銃を構えていた。すぐにも引き金を引くつもりだったようだが、突進してくる女にわずかにひるんだその隙をつかれた。

銃声が響いて物が落ちる音がすると、今度は女が、手首を押さえている男に左手で銃口をつきつけていた。足元には銃を握ったままの右手を踏まれて動けないでいる男が倒れている。

「帰れ」

低い声で女が言った。

「ここでお前たちをやりたくはない」

「逃がしてくれるというのか？ 余裕だな」

銃を向けられた男は震える声で言う。

「そうではない」

男はふつと笑った。

「……そうか、ここか」

「そうだな」

女は顔色も変えずに右足に力を込める。倒れている男がうめき声をあげる。

「否定しても、信用はしてはくれないだろうからな」

「もう、伝わっているさ」

媚びるような笑いが男から漏れる。

「そうか」

女は小さく呟き、引き金をひいた。

誰もが立ち尽くすなか、女は落ちて床に転がっている銃を拾い、倒れている男の手からも銃をもぎ取ると肩からかけたリュックサックの中に無造作に入れた。

「ここを出る。準備をしろ」

そんな一言を告げてからすぐのことだ。

なにが起きたのか頭では判っていても理解まではできていない三人は、催促するように振り返った女を見て我に返った。

「どういうことだ」

一早く冷静になったダグラスが、代表して質問した。テーブルを回り込み、両の手を口許に当てて震えているジェインの肩に手を置いてそつと体の向きを変えさせる。

「ここは危ない。できるだけ早く出た方がいい。質問はここを離れ

てからだ」

「どういうことだよっ！」

ジャックが叫んだ。

「おまえには関係ない」

女は一瞥し、ダグラスを見る。

「娘とおまえだ。準備をしろ。五分待っ」

腕の時計に目を走らせて女は背を向けた。

「ちよつと待てよっ！」

「ジャック」

無視されたジャックは女の方に寄ろうとする。それをダグラスが止めた。

「意味が判んねえよ。どういうことだよ。なんだよこいつらは。おっさんもだよっ！ ずっと、ワケ判んねえよ、俺は！」

「八つ当たりだ、それは」

凶星をさされてジャックは一瞬黙った。が、ぎゅつと両の拳を握って睨み返す。

「そうだよ。八つ当たりだよ。関係ないって？ なら、なんでおっさんは関係があるんだよ。俺にないって？」

判んねえよと呟いてジャックは俯いた。

「一つ質問だ。どこへ行くつもりだ。じいさんのもとへか？」

女は二つの死体を家の中に引きずり込んでいるところだった。流れ出る赤い血が床にたまっていたが、引きずられたために伸びて、妙な模様を描きだす。

「とりあえず安全なところだ。ここは危ない。帰ってはこられないと思っっていたほうがいいだろう」

女は、まるで感情がないかのように淡々と答えた。

ダグラスは息を吐いた。腹をくくらなければならぬらしい。昨夜のデイルの不振な言動が指していたものがこれだったのかと、ようやく理解した。

――俺は了解してないぞ……。

反論すべき人物はここにはいない。そしてまずはそばにいる少女の身の安全を考えなくてはならないのだと自分に言い聞かせた。

「ジェイン、準備をしておいで。じいさんを探そう」

震えていた少女は顔をあげた。恐怖と驚愕とが混ざった表情のまま、言葉の意味を訊ねるような視線を向けた。

「ここを離れよう。俺も準備をする。大丈夫、そばにいるから。：

…じいさんを探そう」

肩を軽くたたいてやる。小さな、小さな肩を包み込むように手を置いて、目線を合わせる。

「着替えを一回分と、上着と、それからお金とを鞆に入れるんだ。

背負えるものがない」

うなずいて走りだすジェインを見送って、ダグラスはジャックを見る。悔し涙を流す少年に近寄り、頭に手を乗せる。

「じいさんの車を出せるか？」

「え？」

「車を出せ。急いだがいい。俺には用意がある。早くしろ」

半信半疑の様子でジャックはダグラスを見上げる。

「頼む」

軽く頭をはたいて、ダグラスは自室へと向かう。しばらくぼかんと見送っていたジャックは我に返って車庫へと走った。

予定時刻を二分オーバーして、四人と一匹は出発した。デイルの作った、雪道でも走行可能な自動車だ。運転しているのはジャックで、女は不審そうにそれをちらりと見たが、特になにも言いはしなかった。だが、危険なのは判り切ったことだった。女が無関係だと言いきるのなら、そうなのだろうと思っても、自分がこの車の運転くらいできるのだとしても、今の彼の仕事を取り上げる気にはならなかった。 - - せめて、街に降りるまでは。

街まで行けば、移動するには逆にこの車は目立つ。列車を使った

方が、人込みに紛れることができる。大切なのは、家からとにかく早く離れることなのだ。それならば、街まででいい。自分の好きな少女を、関係がないために守ることも許されない少年に同情しても仕方のないことではあるが、それでもなにもできないよりは随分とマシなのだ。

「質問だ。あんたは誰だ」

助手席に座っている女に、ダグラスは言った。

扉が開くよりも早くその気配を察し、開いた時には中に入ろうとする二人の男の片方の腕を蹴り上げて銃を飛ばし、もう片方の男の腕を掴んで引き倒し、使えないように右手首を踏みつける。そんな芸当を瞬時にしてしまえるのだ、この女は。そして、顔色一つ変えることなく、人を殺すこともできる。たったそれだけの事実からさえも、聞かなければならないことはたくさん出てくる。

「博士の古い知り合いだ」

「……名前は？」

「……アリシア」

「年齢は」

アリシアと名乗った女は、後部座席を振り返って関係ないだろうというような眼差しを向けたが、諦めたように、再び前方を見た。

「……十七」

「じゃあ、アリシア。じいさんの行方を本当に知らないのか？」

「私は知らない。……探すなら、まずは安全なところまで逃げてからだ。二、三日は姿をくりましたほうがいい。それからならばかわない」

「ってことは、あんたも一緒に探すのか？」

「私は別行動だ。言った筈だ。私には用事がある」

そこまで言うところアリシアは自分のリュックの中をかき回し中から銃を一丁放つてよこした。

「私と一緒にいる間は、私がお前たちを守ってやる。その後は、多分大丈夫だと思うが、もしものことがあったら、それを使い」

受け取ったダグラスは、それを持って余す。生まれてこのかた、持ったことも使ったこともない代物だ。

「……ってことは、あんたと一緒にいると危険というわけか？」

アリシアは首を横にふる。

「そういうわけではない。ならば逃げたりはしない。一緒にいる方が目立つというだけのことだ」

「……判った。あと一つだ。理由は、教えて貰えないのか？」

「博士を見つけたら、訊ねてみるがいい。私の口からは言えることではない」

「……会えたら、だな」

「そうだな……」

ダグラスと女の会話をジェインは聞くともなしに聞いていた。耳に入ってきていただけと言ってもいい。足元に座ったマックスが顎を膝の上に乗せていても、その頭をなせていても、なんだか自分一人取り残されているような感じがした。ゆっくりと考える時間が欲しかった。ゆっくりと頭を整理する時間が欲しかった。なのに繰り返される光景は、一つだけ。

女が引き金を引き、男が倒れる。

その繰り返し。

頭の中で繰り返される光景を無感動にじつと見ていたジェインは、ふとダグラスの膝の上の物に気がついた。黒い小さな銃はジェインで繰り返される頭の中の光景と結びつき、ようやく恐怖を呼び起こした。

そして、悲鳴をあげた。

やけに疲れた顔をしてジェインは眠っていた。ダグラスはそれを見て、溜息をつく。やっと宿に泊まれたことへの安堵というよりは、これから先のことを思っただけの不安のためだった。

ジェインが悲鳴をあげ気絶してしまった後、ジャックに運転させていた車は捨てることにした。街中まちなかに入ってからでは却って目立つと思ったからだが、それでもこの四人と犬一匹のとりあわせは、奇妙で随分と目立つように思われた。十二年に一度の大祭のため、街が人で溢れていなくなったらと思うと、背筋が凍るような気持ちになる。だが、とりあえずは……。

ダグラスは椅子に座ったまま頭の後ろで手を組んで、アリシアを見上げるようにした。腕を組んで壁に寄り掛かるようにしている。その視線は何を見ているのか。

「どうする」

訊ねたのはジャックのことだ。本当なら車を捨てた時点でジャックは家へ帰すつもりだった。出来なかつたのは、少年の真剣な表情ゆえだ。甘いと責められると覚悟していたダグラスは、アリシアが特になにも言わなかつたことを不思議に思いながら、感謝していた。どうせ、二、三日姿を隠したあとは別れなくてはならないのだ。その間、一緒にいてもかまわないはずだった。宿を見つけたあとはどこかへ行くと思っていたアリシアと一緒に泊まることを知るまでは、彼もあえてそのことに触れるつもりはなかつたのだが、どうやら事態はどこかで変わってしまったらしい。

「予定は変わらない。おまえ達はここでしばらくじっとしてから動けばいい。私は今夜ここを発つ」

「今夜。……だからか」

呟くように言うと彼女は軽く肩をすくめる。

「祭りが最高潮に達した頃に人込みに紛れる」

「おれ、家に連絡したいんだけど」

アリシアの横で床に直接座ってジャックが言う。ようやく言えたという感じだ。無理だろうなという気持ちも伝わってくる。

「あきらめろ。それなら、車を捨てた時点で帰れば良かったんだ」
アリシアの声は冷たい。それは正論だからジャックは反論できない。

ダグラスも押し黙る。ジャックの両親はきつと心配してジェインの家までやって来るだろう。そこで見るものに驚き、もちろん息子の心配をするだろう。無事であると言いたいジャックの気持ちはよく判る。だが、恐れているのは、襲って来る者たちが、あれで全部ではないだろうということだ。アリシアが、急いで家を離れようとしたのは、そのままそこにいると、また襲われるからだだろう。雪の上に残るタイヤの跡を見て、追手がかるだろうが、人数が多ければ家を見張る者もいるはずだ。その見張りが、ジャックの両親を見て、どういう行動に出るか。それを考えると恐ろしかった。ジャックを帰しておけばよかったと、ダグラスは後悔する。

「私にも、一つ聞きたいことがあるんだが」

アリシアの声は、少し迷ったように響いた。

「博士との関係だが、いいか？」

真つ直ぐな視線を向けられて、ダグラスはわずかに躊躇った。

「それを聞いてどうする」

「別に、どうもしない。お前のような男がいることを知らなかったので驚いた。それだけだ」

理由は、本当にそれがすべてなのだろう。アリシアの言葉に嘘はないように思えた。だが、理由のすべてを語ったとしても、その意味はとりかたによって随分と変わってくる。

「……居酒屋で拾われた。飲んでいたら、じいさんも飲みに来ていた。気があって、話が合って、気がついたらじいさんの家で寝ていた。それ以来、居候している」
「変わった経歴の男だな」

アリシアは笑った。

「……その娘のことは頼んでもいいか？」

「ただの知り合いの孫娘のことを、やけに心配するんだな」

ダグラスには、それは別に意味のない受け答えに過ぎなかった。

だから、アリシアは素直に肯定するだけと思っていたのだ。だが、彼女は少し黙ってから「生きていれば、同い年の少女を知っている」と言った。まるで言い訳のような言葉に、ダグラスは驚いた。

「巻き込みたくなかったんだが、悪いことをしたな」

「……いや……」

どう答えたらいいのか、少し迷う。そこに真実があるような気がした。

懐かしい歌が聞こえた。

ジェインが目を開けると、女が壁際に椅子を寄せ、片膝を抱くようにして座って歌っていた。

話している時は、ぶっきらぼうでまるで男のようだと思っていたが、歌声は透明で美しい。薄い色の金髪に透き通るような白い肌、そして青い瞳。それらとその透明な声は、とても似合っている。

粗末な衣服が勿体無いと、思いながら、ジェインは彼女の歌声に自分のそれを重ねた。

歌声が止み、顔がこちらに向けられる。

「目が覚めたのか」

透明な声の代わりにまたぶっきらぼうな低めの声が出た。

「ダグラスたちは食糧を買いに出ている」

「今の歌、子どもの頃、お母さんが歌ってくれた」

と言っても、実際に歌ってもらった記憶はあまりない。子守歌だったらしい。

「そうか」

「おじいちゃんを知ってるの？」

ダグラスとの会話の中でそう言っていたのは覚えているが、ちゃんと聞きたいと思った。

「古い知り合いだ」

「ごめんなさい。おじいちゃん、出かけていて」

「気にしなくていい」

女は小さく首を横に振る。

ふと、その瞳の色が柔らかくなったのを見て、ジェインは微笑んだ。

・・・笑っている方が似合うのに。

「こちらこそ、巻き込んでしまって悪かった」

「あ」

唐突に思い出した。

目の前の美しい女が、ただの女ではないことを。自分が車の中で悲鳴を上げたことを。その理由を。

だが、女の瞳が翳るのを見て、ジェインは唇を噛んで湧き出してくる恐怖に耐えた。

何故だか、女に辛い思いをさせたくないと思ったのだ。

カツンと小さな音がして、金色の毛のカタマリが姿を現した。床に爪が当たった音だろう。

「マックス」

小さく鼻を鳴らして顔を近づけてくる犬を撫でてやると、少しだけ気持ちがおさまった。

「無理しなくていい」

女は同じ姿勢のまま言う。だからジェインは小さく笑うことができた。

「大丈夫。思い出したただけだから」

倒れていく男の映像が頭の中でフィードバックされる。そして、倒れたまま身じろぎしない姿。

それがどういふことなのか、考えると自然と体が震えてくる。けれど、見なかったふりはしたくない、とジェインは思った。

「怖かっただろう」

静かな声が心に入ってくると、自然に肯いていた。

「そういう時は、怖がっていいんだ」

また一つ肯くと、涙がこぼれた。

「近づいて、いいか？」

ぶっきらぼうな声が少し掠れる。

ジェインが肯くと、立ち上がる気配がした。

ベッド脇にいるマックスが様子を窺っているのに気づいて、安心させるように撫でてやる。

その横に立った女は戸惑うように見下ろしていた。

「触っても？」

何故そんなことまで訊くのだろうと思いつながらバカの二つ覚えのように肯くと、手が伸ばされ頭を撫ぜられた。

ゆっくりと、そつと、撫ぜられる。

たどたどしい動きが繰り返され、ジェインは次から次へと溢れてくる涙が止められなかった。

いつの間にか膝立ちになった女の顔が近い。

「……………かっ…………た」

「ああ」

「こわ…かった…」

手を伸ばして、女の体にしがみつき、自然と上げて泣いていた。ジェインは、ただただ、頭を撫ぜる女の手の感触を感じていた。

「なあ、よかったのかよ」

パンとソーセイージャヤチーズを入れた紙袋を抱えて、ジャックが不機嫌に言う。

「何が？」

聞き返すまでもなく意味は判っていたが、ダグラスはそう言うってみる。だが、少年は黙々と歩くだけだ。

仕方ないので、カツカツと石畳に響く靴音に耳を傾けながら、次に何か言うのを待ってみることにした。

大祭の関係でか、宿からそう遠くない所に屋台を見つけ、食糧を仕入れて帰る途中だった。

道行く人々は、普段着と呼ぶには少々小綺麗な装いで、どこか浮き足立っている。

男たちはジャケットを羽織って帽子を被り、女たちは長めのスカート姿はいつもと同じだが髪を整え化粧をしている。

それらを見るときもなく眺め、先に行く少年の後頭部を見つめた。

「……あの女、危険じゃないのかよ」

話はちゃんと続いていたらしい。こちらをチラリとも見ようとせずにスタスタと歩いていく。

「大丈夫だろ。マックスもいるし」

「マックスじゃ無理だろ」

今度はすばやい返事だった。

「なんだろな。アリシアはジェインに危害を加えない、そんな気がする」

「言い切れるのかよ」

「じゃあ何か？ じいさん家での態度は、俺達を油断させて、ジェインに何かしようと思ってるのか？」

「そうじゃないとは言えないだろ」

まあな。と心の中で返事をしながらもダグラスは別のことを口にする。

「そんなことをする理由が判らないだろう」

理由なんていくらでも想像できたが、それでもダグラスにはアリシアがジェインをどうこうする姿を思い浮かべることができなかった。

「それに」

振り返って口を開きかけたジャックを制するように言葉を継ぐ。

「必要なことのように思えるんだよ」

ダグラスの言葉にジャックは立ち止まり思いつきり眉を顰める。

「…それは、ジェインに何かあってもいいって思ってるってことか？」

「そうじゃないけどさ」

呟くように言って横を通り越す。

そうではない。そうではないが、アリシアが反対しなかったことが、二人を置いて買出しに出たことが悪い判断ではないと思えるのだ。

眠っているジェインを置いて食糧を買いに出ると言ったのはダグラスだった。

どうやら追われているらしいアリシアを外に出すことが良いこととは思えなかったし、ジャック一人を大祭で賑わっている人ごみの中に行かせるのも心配だ。消去法で自分しかいないと結論付けただけだ。

それに対し自分が行くと言い出したのはジャックだった。仕方ないので一緒に行くことにすると、不満そうな視線が二人から注がれた。

一つはジャックからの不審を露わにした視線。もう一つは困惑の混ざった視線。

その表情が意外で、興味をそそられた。

だが、彼女はすぐに元の無表情になり、それがいい、と肯いた。

あの困惑は嘘ではない、そう思えるのだ。

であるなら、彼女はジェインに危害を加えることはない。そう思ったのだ。

「おいっ」

ジャックが呼びながら早足で追ってくる。

「おい、おっさん。そうじゃないって、何だよ。言いかけて黙るなよ」

ダグラスはにやりと笑ってみせる。

「ガキには判らないこともね、おっさんには判るんだよ」

どう説明したところで理解できないかもしれない。それだけでなく、宿屋はすぐ目の前だ。話を打ち切らねばならない時もある。

「さて。ジェインは起きたかな」

気持ちを切り替えるように言ってみせると、ジャックは気づいたようだった。悔しそうに唇を引き結んで上目使いで見てくる。

「ま、あとでな」

片手で後ろ頭を軽くはたき、狭い入り口から中に入る。

そんなに不機嫌になるなら残ればよかったのだと、少しだけ思わないでもない。でも、出かけてからようやくジェインが危険かもしれないということに思い至るくらい、彼も極限状態だったのだと考えたら、苛めるのはまた今度にしようと思えたのだ。

狭い階段は木製で、一段ずつ上がるとミシミシと音を立てる。後ろをゆっくりと上がってくるジャックの足音は、たった一人に向けて音がしないように配慮されたものだった。

階段を登りきり廊下のどん詰まりの目的の部屋が近くなると、歌声が聞こえてきた。美しい、透明感のある声は、アリシアのものだろうか。

「この歌、ジェインがよく歌っている歌だ」

呟くように言うジャックの言葉は聞こえたが、ジェインの声ではないことも確かだ。

こういう部分が、ジェインに関してアリシアを信用できると判断した理由だ。そう言ったところで、ジャックに理解できるかは不明だが。

やがて、か細い声その歌声に重なり、すぐにどちらも聞こえなくなかった。

「目が覚めたのか」

ドアの向こうから、ぶつきらばうなアリシアの声が聞こえる。

どうやら、ジェインが目覚めたらしい。

部屋の前でダグラスとジャックは足を止めて、二人の会話を聞いていた。

どうしてか、ドアを開ける気にならなかった。

静かな会話だった。人見知りの激しいジェインにしては、やけに打ち解けた雰囲気を感じさせる。

不安を覚えないわけではない。

車で移動している途中で、彼女は突然悲鳴を上げた。あの時ジェインは、アリシアが放つてよこした拳銃を見ていた。

おそらく、拳銃を見て、恐怖が蘇ったのだろう。

無理もない話なのだ。たった十歳の子どもで、初めて人が目の前で殺される場面を見たのだから。

むしろ、男達が倒れたあの時に悲鳴を上げなかったほうがおかしいくらいだ。

だとすれば、アリシアといることである時と同じように恐怖を思いつくことも考えられる。

だが。

部屋の中の二人の会話は、一瞬そんな危うさを感じさせたが、すぐに落ち着いていく。

そして、アリシアの移動する気配がし、ジェインの泣き声が聞こえてきた。

ダグラスは天井を仰いで軽く息をついてから、立ちすくむジャックを見下ろし、その肩を軽く叩いた。

どこか泣きそうな顔つきで見上げてきた少年に、床を指差す。

意味が判らず眉間にシワを寄せるのを無視し、廊下の床に腰を下ろし、壁に背中をあずけた。

二人つきりにした理由はこれだ、と、彼は思い至った。

ジェインが、ちゃんと恐怖を心で感じることに。

だが、それが目的だったとは判ったが、何故、恐怖の対象となるアリシアに任せようと思えたのかまでは答えが出ない。

- - 何故だ？

ジャックが隣に腰を下ろす気配を感じながら、彼は目蓋を閉じた。

カチャリと小さな音がして、ドアが開き、横に座るジャックが見上げる気配を感じた。

ダグラスは目を開けてからゆっくりと見上げ、顔を覗かせたアリシアの様子を窺う。

「すまない。待たせてしまった」

泣いているのでは、と思っていたのだが、どうやらそうではなかったらしい。

ジェインの泣き声が聞こえ、しばらくしてそれが止んだ。それからさらにしばらくしてから、ようやくドアが開かれたのだ。

ジェインは泣きながら眠ってしまったのだらうと想像できる。それが、泣き声が止んだ時だ。では、泣き声が止んでから、ドアが開くまでの間のこの数分は、何をしていたのだらう。

なかなか次のアクションを起こさない女の顔を思い浮かべながら、ダグラスは何故か彼女も泣いているような気がしていたのだ。

「ジェインは、また眠ったのか？」

「ああ」

アリシアは、ドアを大きく開けて、中に入るよう促した。

「もう、大丈夫だらう」

大切なのは、怖い体験を無かったことにすることではなく、その気持ちに寄り添い、認めてやることだ。そして、感情を吐き出させることだ。

奇しくも、アリシアがその役を引き受けることになったのだが、本人にもその自覚はあったらしい。

「助かった」

立ち上がり、ドアの隙間から部屋を覗くと、ジェインの寝顔が見える。

ジャックはその隙に部屋の中に入り、壁際に置かれた机の上に荷物を置いた。

それを確認してから、アリシアのほうを向く。
「ちよつといいか？」

軽く首を横に傾けた彼女は、薄いブルーの瞳をダグラスに向ける。なにもかもを見透かそうとしているようにしばらく見つめていたが、ふと目をそらし、部屋から出てきた。

「ジャック」

小声で呼ぶと少年は顔を向けた。

「マックスと留守番を頼む」

名を呼ばれた犬は床に寝そべったまま頭を上げて振り返り、ジャックは黙ってうなずいた。

後ろ手でドアを閉めたアリシアは「どこへ？」と問うてきた。

それは考えていなかったダグラスはふと黙る。

夜まで人目を避けたい彼女と話せる場所。

「とりあえず、その踊り場で」

下の酒場へ行けば座って話せるだろうが、そういうわけにはいくまい。

見通しが良い場所というのは、逆に言えばこちらからも見易いということだ。そういう意味では安心と思える場所だった。

「判った」

返事を合図に歩きだす。

少し歩いたところで、肩越しに振り返る。

「改めて礼を言う。助かった」

「……いや」

アリシアは小さく首を横に振る。

「あの歌は、子守歌？」

「さあ？」

とぼけるふうでもなく、アリシアは首を傾げる。

「ジェインもよく歌ってるんだ。歌詞からすると子守歌っぽくはないから、不思議だね」

そう言うのと納得したように肯き、くすりと笑った。

「言われてみればそうだな」

階段を降りながらその様子を窺っていたダグラスは、踊り場で足をとめて、壁に寄りかかる。

「あの男たちとの会話は、悪いけど聞こえてたんだ。正直なところを教えて欲しい。…二三日姿を隠すだけで本当に安全なのか？」

「あの家に戻らなければ、すぐにどうこうということはないだろう。意図的なのかそうでないのか、アリシアは質問と少しずれた回答をよこす。

「つてことは、戻れば、すぐに何かある可能性が高いわけだ」

アリシアは小さく笑った。

「二年逃げ切れば、大丈夫のはずだ。それまでは、追われる可能性もある」

「またもやずれた回答だ。」

「じいさんを探した方がいいってことか」

「巻き込んでしまったことについては、詫びる。すぐに帰ればよかった」

「どうやら、アリシアはストレートに答える気がないのだとダグラスは判断した。」

だが、情報はよこす気があるようだ。

戻れば、危険。二年間は逃げたほうがよい。

「きみは、どこへ行くつもりだ？」

「私は博士から手紙をもらったんだ。騙された」
苦笑を漏らす。

「どうしても会わねばならない」

ダグラスは肩をすくめた。

「じゃあ、じいさんに会えたら伝えてくれ」

昨夜のデイルの様子を思い浮かべる。ジェインを嫁に貰えなどというバカな話は別として、なんら変わったところは見られなかった。だが、そこが一番の問題だと、ダグラスは考えた。

ジェインとは二十歳も違う。決して恋愛に発展しない年齢差では

ないが、相手はまだほんの子供だし、それよりもなによりも、唯一の身寄りとも言える祖父が大切な孫を託す相手としては一番の問題となるだろう。

突拍子ないにもほどがある。

問題は、何故そんな突拍子ないことを言い出したか、だ。

思い返してみれば、ひと月ほど前からなにやらそわそわしているように思えた。デイルとそれほど長い付き合いではない彼には確証はなかったが、何かを待っているような、そういう様子が窺えた。

ある日、ジャックの母がやってきて世間話に見慣れない若い女が麓の町に現れたと言った時には、その容姿をさりげなさを装って聞き出していた。

今となれば、怪しい態度だったと思えるが、その時には気にもとめなかったようなことばかりが思い出された。

「約束は守る。取り消しは無効だ、と」

次の日目が覚めて二日酔いの頭痛に思考力を奪われながらそれでも考えていたら、普段ならいないはずのジャックがいた。そして、普段ならめつたに側から離さない愛犬を使いに出そうとしていた。

確証はない。まったくくない。

だが、ピースがはまったような気がしたのだ。

昨晚のデイルの発言と併せて、何かが起こる、あるいは、何かを起こす合図ではないか、と。

「約束？ そう言えば伝わるのか？」

「あんたの孫は大切にするよ、と」

につかりと笑ってみせると、アリシアは目を見開いた。

その意外な表情にダグラスは内心首を傾げる。

「……人の趣味にとやかく言うつもりは無いが」

アリシアは酷くうるたえながらようやく口を開いた。

「おまえは、まだほんの子供が、好きなのか？」

言葉を選びながらのセリフは、微妙に変になっていたが、言わんとしていることは判ったのでダグラスは肯いた。

「年齢なんて関係ない。彼女が好きなんだよ」

もしデイルが嫁云々の部分は本気ではなかったとしたら、どんなにか焦るだろう。

だから、ちゃんと本気と伝わるようにアリシアに伝える。

少なくとも、アリシアが誤解しないと、デイルを騙すことはできない。

しばらくダグラスの表情を読むようにじっと見ていた彼女は、ゴクリとツバを飲み込んだ。

「……判った。伝えよう」

まだ動揺を隠せない様子で肯いて、目をそらす。

様子はおかしいが、仕方ないとも思えて、ダグラスは軽く息を吐き気持ち切り替えた。

「ありがとう。じいさんに会えることを祈っているよ」

そう伝えると彼女は再び見上げてきた。

「悪いことをした。本当にすまないと思っている」

薄いブルーの瞳には濁りが無い。透き通っていてガラス玉のようだが、だがどこか温かみがあった。

「渡そうかどうしようか迷っていた」

懐から一冊の本を取り出す。

「博士の日記だ。逃げるのに、必要な情報もあるかもしれない」

「君に必要なだから持ってきたんじゃないのか？」

「もう読んだ。読み終わったら破棄することをすすめる」

押し付けるように渡されて、ダグラスが受け取ったらアリシアは背を向けて階段に向かった。

「話は終わりだ。夜まで、もう少し辛抱してくれ」

振り向きもせずそう言うと、彼女は階段を登って行った。

渡された日記を持ったまま、彼は去っていくアリシアの背を見ていた。

一緒に部屋に戻っても良かったが、なんとなく彼女のためについていけないほうがいいように思えたのだ。

それにしても、と、彼は笑う。

終始無表情に近い彼女の驚いたかおが思い出されておかしくなる。一般的に見ても、驚くほどのことなのだとは再認識すらする。そして、苛立ちを覚える。

「- - じいさん、何やってんだよ。」

右手に持った日記の表紙を見つめる。

ここに何がしかの答えがあるだろうと思われたが、今開くことは躊躇われた。

読むのなら、誰にも見られない場所が良いように思われた。

溜息を一つ落とし、部屋に戻ることにする。

そろそろアリシアは落ち着いただろうか。

そんなことを考えて歩き出すと、名前を呼ばれた。

彼は、その声の方角を見た。階段の下のほうだ。

「パティ……」

以前の勤め先の後輩だ。街ゆく人々とは違う、きつちりしたスーツを身につけて立っている。一生懸命がとりえのような新人で、やけに懐かれていた。

赤に近い金髪の巻き毛を肩のところであわわ揺らし、不安そうな瞳で見上げている。

「どうしたんだ？」

言いながら、自分のセリフに苦笑する。街まで来たということはそのうちのこと。昔の同僚に会う可能性があるということだ。それをまったく思いついていなかった自分に呆れる。

「さつき、そこで見かけて……」

ジャックと買い物に行った時だろう。

「あの。お時間ありますか？」

必死の形相で見上げる彼女に笑みを返し、ダグラスは階段を降りる。

「そうだな。少し話そうか」

隣の食堂へと足を向ける。

そういえば、誰にも何も言わずに辞めたのだと、改めて気づく。

この先、アリシアの言うことを信じるなら、二年間は逃げ回らなければならなくなるのだろう。ならば、伝えておいたほうが良いと思っただのだ。

二年間なんて長い期間、逃げ切ることが可能かどうかなんて判らない。

判らないが、この運命からは逃げられないのだと、なんとなく気づいていた。

認めたくない現実と、認めたくない未来は、感覚を麻痺させている。

それでも、大変なことが起きていることはどこかで理解できている。

「課長は元気？」

テーブルについて、飲み物を頼んだところで口を開く。パティは無言のまましっかりと肯いた。

「良かった。心配してたんだ。最後にわがままを言ったから」

「課長も心配してました。連絡の一つくらいよこせ、って言ってました」

彼女の責めるような口調に思わず笑う。

「ありがとう」

というと、ぽかんとした顔でみつめられた。

「……………何？」

問いかけると、小さく首を横に振る。

「今、幸せなんですね」

なんとなく、彼女が言いたいことが判り、ダグラスは思わず苦笑した。

仕事を辞める前、いかに自分が酷い顔をしていたのかが想像できる。

「うん。幸せ、かな」

いろいろ問題は抱えていても。

その言葉は飲み込んで、肯定する。

時間に追われ、数字に追われ、必死で仕事をしていた。

初めは楽しかったのだ。

それが、いつの間にか楽しくなくなっていた。

楽しくなくなつて、どんどん自分の時間が減つていった。

のめり込み過ぎて、いろんなことを自分で抱え込んだ。

そして、上司から、休むように言われた。

意味が、判らなかつた。

彼は説明しようとしたが、理解することを自分は拒否した。

拒否して、逃げて、酒にすがつて、デイルに拾われた。

拾われて、社会人としてあるまじき無断欠勤をし、ようやく長期

休暇を願い出た。わざわざ山の麓まで下りて、電話で伝えた。

「課長に伝えておいてくれるかい？」

「はい」

彼が表情を改めると、後輩はすつと背筋を伸ばした。

「本当は直接挨拶に行きたいけれど、どうやら無理そうだから」

と前置きをして、辞めたいことを伝えた。

彼女はどこかで気づいていたのだろう。特に驚いた顔はしなかつた。

「……私、外で見かけた時にちょっと判つたんです」

パティは静かに話した。

「もう、戻つて来ないつもりなんだ、って」

「そついう顔をしていた？」

問うと、小さく、しかししっかりと肯く。

「それでも、どこかで戻ってきて欲しいと、もっといろいろと仕事を教えて欲しいと思っていました」

「君なら、大丈夫だよ」

「そんな言葉、欲しくなかったなあ……」

後輩は、昔よく見たような、泣き笑いのような顔で呟くように言う。それから、頭をふって、表情を改めた。

「私で、お力になれることはありませんか？」

以前なら、根掘り葉掘り聞き出そうとしていたのが、こつこつとここで成長したなと思わせる。

だが、ダグラスは、試すように彼女の瞳を見つめた。

「なぜ？」

理由を問うと、パティは苦笑を落とした。

「今の服装は、旅装ですよね？　しかも、かなり慌てて用意をされた、と感じます。第一に足元。履きなれた靴が良いとはいえ、その服装にその革靴はあり得ません。次にコート。どこの雪山に行くんですか？」

「合格」

「……昔を知っているから、とても切羽詰った状況に見えます。責めるような真剣な表情になる。」

「連れに、十歳の女の子がいるんだ」

「男の子じゃなくて？」

「あの子とは別に」

「判りました。出発はいつですか？」

「話が早くて助かる。早くて明日の朝」

期限を告げると、彼女は立ち上がった。

「すぐに用意をします。今晚もう一度うかがいますが、どちらに行けばよいですか？」

「さっきのところで」

後輩はうなずくとすぐさまきびすを返した。

頼もしく見えるその背を見送って、椅子の背もたれに体を預ける。アリシアは二年という。

自分にとっても、ジャックにとっても二年など、大した問題じゃない。

問題は、ジエインなのだ。

十歳の少女は、成長する。今は子供でも、大人になっていく過程で、避けては通れないものがある。

本気で逃げようと思ったら、そういつたことも覚悟が必要だ。

だが、自分は男で、正直な話どうしたら良いのかまったく判らない。

また、単に体の成長の問題だけの話ではない。

知り合いとはいえ、血縁関係でもなんでもない男との二人旅なのだ。それも、気楽な旅ではない。何かから逃げるための旅なのだ。なにが精神的負担になるかも判らない。

後輩に頼んだのはそういったことも含めてのフォローだった。

商社の営業という仕事柄、女性とはいえ、出張は多い。

「おや？ お連れの方は帰られたんですかい？」

酒の入ったグラスをテーブルにおいて、店のおかみさんが声をかけてきた。

「そうなんだ。ちょっと振られてしまっただね。俺一人じゃ飲みきれないから、よかったら」

と、グラスを一つ手に持ち、もう一つを勧める。

おかみさんは、大げさに喜びを現して、躊躇なく飲み干した。

デイルの日記を片手に持ったまままでいたことを思い出し、テーブルの上に載せる。

『まだ見ぬ明日のために』

およそ日記にふさわしいとは思えないタイトルが手書きの文字で書かれている。

表紙をめくると、紙が一枚挟まれていた。

『あの時の約束のままに』

ダグラスは思わず表紙を閉じ、コートの内ポケットに入れた。やけに嚴重だ、と感じたのだ。

アリシアがこれを探し出したのは、一人で地下室に下りて行った時だろうか。

この表紙を見てこれをとってきたのだとすれば、彼女には、ここに何が書かれていたのか判っていたということにならないか？ そして、デイルも彼女がこれを求めていることを知っていたということにならないか？

…いつか『帰ってくる』きみ。

つまり、アリシアは帰ってきたのではないのか？ やってきた、のではなく。

グラスに残っていた酒をあまり、目をつむる。

思わず苦笑が漏れた。

昨晚までは、こんなことが起こるとは思ってもいなかった。

流されるようにジェインとジャックを連れて家を出て、この先二年を逃げて過ごすことを決めてしまっている。

まだ、一日も経っていない。

そしてまだ、心のどこかで迷っている。

たかが二年、されど二年だ。

受け入れてしまっているのは、それしかない、心のどこかで思

っているからだ。

それ以外の選択肢を思いつかないからだ。

……なのに、気になってしかたがない。

デイルじきじきに頼まれたとはいえ、自分は赤の他人だ。

アリシアからも頼まれたからとはいえ、受ける義理はない。

選択肢が無いように見えるとはいえ、それは、ジェインを連れて
のことで、自分一人のことではない。

なのに、気になって仕方が無い。

何故、デイルはいなくならなければならなかった？

何故、アリシアはやってきた？

何故、ジェインは逃げなくてはいけない？

何故、二年という区切りがある？

疑問は次から次へと湧いてくる。

だが同時に、それらが身の丈に余る好奇心だということも判って
いた。

彼はまぶたをあけ、薄暗い天井を見つめた。

(でも、ここで逃げたら後悔するよな…)

浮かぶのはジェインの笑顔だ。

恥ずかしそうに困ったように笑う十歳の少女を、置いて逃げる選
択肢は彼にはなかった。

少なくとも、せめて誰か信頼できる人物にまかせるまでは。

彼は再び苦笑する。

(なら、決まりだ)

そして、わざと心の中で呟いて立ち上がった。

心が決まれば、しなくてならないことは次から次へと浮かんでき
た。

まずは、金銭面だ。

幸いなことに、働いていた時分の貯えが少しはある。それで二年

間暮らせるかどうかは判らないが、少なくとも当面の間はそこには困らない。

次は、どちらに向かうか、だ。

本当なら、デイルを追いたいところだが、アリシアも追うということが判っているのにそれをするには抵抗がある。アリシア自身がジェインのそばに居ることが問題と言うのなら、物理的に距離が近くなることも避けた方がいいだろうと思えた。

ならば次にしなくてはならないことは、アリシアとは別の方向に進むことだが、本人が教えてくれるかどうかは謎だ。できればヒントを得るために日記に目を通したい。

腕時計に目をやり、部屋に引き上げることにする。

少なくとも、不特定多数の目があるこの場よりは落ち着いて読めるだろう。

他にもいくつかしなければならぬことを考えながら、立ち上がると目ざとくみつけたおかみさんがやってくる。その手に二人分の硬貨を載せて軽く手を振って出口へと向かう。

と、目の前に見知った顔を見つけた。

戸口に手を置いてとおせんぼするようにしながら荒い息をしている。

「課長」

パティの仕業であることは容易に想像できた。

「間に合ったか」

息を切らした男は、ようやくそれだけを言うと、呼吸を整えるためにひたすら深呼吸を繰り返す。

四十代くらいの山男のような男だ。

「まさか走ってきたんですか？」

ダグラスが呆れたように言うと、恨めしそうな顔をしてから、親指で外を示した。

「どうやら出ようということらしい。」

「いや、今あんまり遠くには……」

行けない、と伝え、店の中に戻ることを提案する。と、ぎろりと睨まれた。

「あー、えーと。はい。判りました…」

何故、時分はこの男に弱いのだろうと首をひねりながら、ついていくのだった。

男……元上司であるロブが連れていったのは、宿のすぐ近くのベンチだ。祭りで賑わう目抜き通りからは一本中に入った通りのせい、人通りはそう多くはない。あくまで比較の結果ではあるが。そのせいか、そのベンチにも座る人がいなかった。

「あー、死ぬかと思った」

ベンチに腰を下ろしさらに数分たって、ようやく呼吸が整ったらしい。

「もう年なんだから、無茶しないでくださいよ」

心配を隠し呆れた顔と声で言ってる。

「……元気そうだな」

が、相手にはなってくれないようだ。

「……わがままを聞いてもらったおかげです」

仕方ないので首をすくめて礼を言う。それは本心からのことだった。

「戻ってくることを期待してたんだがな」

苦笑を漏らす。

その様子を見ながら、変わらないなと思う。最後に見てからほんの数か月なのだから当たり前だが。むしろしっかりと成長を見せたパティの方が恐ろしい。

「すみません」

「聞いたよ。旅に出るって？」

「はい」

「だから辞めるって？」

ダグラスは思わず笑った。

「もっと早く言うべきだったのに、ずるずると延ばしていただけです」

元上司はイヤそうな顔をした。

「…休みなんかやらずに、とっとと連れ戻せばよかったです」

「そんなことされてたら、もっと別のところに逃げてましたよ」

「ま、だるうけどな」

軽く言っつて肩をすくめる。

「この後、家内と子供たちと待ち合わせなんだ」

賑わっている通りのほうへ目を向けて彼は言う。

夜中、日付が変わる頃、広場には家々から持ち寄られた供物の形をした蠟燭が集められ火が灯される。広場の中央をあげ、ぐるりと取り囲むように火の灯った蠟燭が置かれる。中央には、観客の中から子供が数人選ばれて入れられる十二年に一度の吉凶を占い、平安を祈る祭りだ。

子煩悩で知られる上司らしいと、ダグラスは笑う。

「少しの間でも、会えてよかった」

「こちらこそ、ありがとうございます」

「帰ってきたら、連絡を寄越せ。働き口くらい世話してやれるかもしれん」

「その時は、是非」

二人は黙ったまま互いの手を握りあった。

6 (後書き)

思ったところまで進みませんでした…

しかも、セリフばっかだし。

「課長」は悩んだ末のものです。

一応「チーフ」とか、単に名前とか考えたのですが、これについては、そのうちかえるかもしれません。

大通りに向かうという上司と一緒に歩く。宿はすぐそこなのに、屋台を冷やかし、待ち合わせ場所にいる子供たちと妻の様子を語る上司に相槌をうちながらだと、なかなか着かない。

「お」

上司がふと足を止めたのは、不思議なデザインのアクセサリを並べた露店だ。大きいものは直径六センチくらい、小さいものは五ミリくらいのサイズの丸い金属の板に何かの絵と思われるものが彫つてあり、緑色の石がはめられている。ペンダントからイヤリング、指輪まで道の上に布を敷いて所狭しと並べているのをしゃがみ込んで物色する。その姿がやけに真剣だ。

「娘さんにですか？」

問いながら、以前聞いたことのある家族構成を思い浮かべる。上は確か二十歳をこえ、下は五歳だったか。早婚で子沢山。ひそかに奥さんが大変だ、と思っていたのを思い出す。

「んー。今年十歳になるのがいてな。『祈りの子供』に選ばれたがつてるんだ」

「ああ、おまもりに」

よくよく見れば、値札と一緒に説明書きがあり、恋愛成就や、願い事成就やらいろいろある。

「これなんかどうだ？」

上司が手に取ったのは、革紐を通したペンダントだ。

「いいんじゃないですか？」

「なんか、投げやりな言い方じゃないか？」

「娘さんを見たことがないですからね」

言い返すと、納得したようにうなずき、布の上に戻してまたもや真剣にみつめる。

一緒になって見るともなく見ていると、一つのペンダントが目

入った。

上司が選んだものとデザインは同じ。だが、大きさはめてある石の色がちょっといいなと感じさせた。

「それ」

指をさすと、店主の女は黙ったままそれを手にとった。

他と比べて緑が濃い。大きさも小さめで、ジェインに似合いそう
だ、と思う。

「一つ貰うわ」

コートのポケットに手を突っ込み値札の金額と同じだけをとります。店主は金を受け取るとペンダントを小さな革製の袋に入れて渡
した。

それを懐にしまっていると、隣から視線を感じて手を止めた。

「な、なんですか？」

「パティは男の子と一緒にだったって言ったが、女の子だったのか
？」

「え？ あ、はい」

その問いから、彼女が詳しいことは話していないことを知る。

「まさかと思うが、これ、か？」

上司はやけに真剣な表情で小指を一本立ててみせた。

「……………違います。彼女から何を聞いたかしりませんが、断じて違
います。世話になってる人の孫娘なんですよ」

妙な疲れを感じながら、そういえば、アリシアにはわざと誤解さ
せたことを思い出し、少し反省をする。

上司は破顔し、ばんばんとダグラスの背を叩いた。

「そうだよな！ 十歳といえばまだガキのガキ！ おまえがそんな
のを相手にするわけではないよな！」

「そうですよ」

少し怒ってみせると、声を挙げて笑う。

「まあ、でも。おまえでもそんな顔してこんなもんを買う相手がい
るんだと思っとな」

どんな顔だ、という疑問はが浮かぶが、あえて突っ込まないことにした。

上司は、並べられたものを見ながら続ける。

「ちよっと、ほっとした」

ダグラスが選んだものより小さなペンダントを二つ手に取り、もう片方の手で上着のポケットから金を出すと店主は、革製の袋を持ち上げてみせる。それを身振りで断り、反対側のポケットにしまう。

「もう、本当に大丈夫そうだ」

「どういふ基準ですか」

「さてね」

上司はにやりと笑ってみせると、歩き出した。慌てて人ごみに紛れるように進む背中を追う。

「あ」

まだ話し足りない。

ふとそんなふうに思い、声をかける。

「なんだ？」

肩越しにちらりと振り返る。

「水晶魚って知ってますか？」

口をついて出たのは、何かが起こるだなんて思いもしなかった昨日の夜に聞いたばかりの話。ジェインもこんな気持ちだったのかとふと思う。

そんなダグラスの気持ちには気づかない上司は、軽く眉を寄せている。

「なんだ、それ」

「昨日聞いたばかりのおとぎ話ですよ」

うねるように歩きながらの会話なので、おとぎ話部分のみを話す子育ても手伝っているらしい上司なら、そういう話も耳にしたことがあるのでは、と思ったのだ。

少なくとも、ダグラスは聞いたことがない。しかも、ジェインの話が本当なら、信じて旅に出た人物もいるほどの「おとぎ話」だ。

そういう話が、広く知れ渡っていないことがなんだか不思議な感じがしたのを、思い出す。

「知らねえなあ…」

「地域限定のものでしょうかね」

「どうだろうな」

そうこうしているうちに、ようやく宿の近くまで辿りついた。

「じゃあ」

立ち止まると先に行く上司も足を止め、体の向きを変えた。

「おう。またな。その話については、何かわかったら知らせてやるよ」

「いえ、そこまでは」

首を左右にふる。そこまでを求めたものではない。

「だから連絡先を教えろって話なんだが、無理か」

苦笑を漏らす上司にそうではないと再び首を横にふる。

「教えたくても難しいんですよ」

「……なんだか、行くなと泣いてすがりたくなってきたな」

「可愛い女の子なら効果絶大ですけどね。むさくるしい男にすら
れでも逆効果ですね」

「ふん」

上司は肩をすくめて息を吐くと背中を向ける。

「元気でやれよ」

振り向きもせず、片手を頭の高さまで上げてひらひらと揺らす。

ダグラスは黙ったままその背中を見つめていた。

目を覚ますと心配そうに覗き込むジャケットと目が合った。目が開きにくい。泣きながら眠ったから腫れているのだろうと思うとジエインは赤面してしまう。

「大丈夫か？」

「うん」

小さく肯くと、ぎゅっと寄せられた眉根が少しゆるむ。それに笑みを返してから上体を起こし、アリシアを探した。

体を起こすと、ジャケットの体の陰になっていた女の姿が見えた。天井から吊るされたランプの光が届かないところに、ひっそりと座っていた。うつすらと見える表情は、心配そうに眉が寄せられているようだった。

「アリシアさん」

声をかけると無言のまま問い返される。

「ありがとうございます」

小さく首を左右に振るだけの返事だが、嫌な感じはなかった。

ふっと、アリシアにしがみついて泣いたことを思い出す。頭を撫ぜられた感触と、匂い。

お母さんみたい。

思ってから慌ててその考えを打ち消す。アリシアは自分と七歳しか変わらないのに、失礼すぎる、と。

「腹、すかねえか？」

一人頭の中であたふたしていると、ジャケットが少し焦ったような声で言う。視線を動かしたその目の端で、アリシアが小さく微笑んだように見えたが、慌てて視線をもとに戻した時には既にいつもの無表情に戻っていた。

「うん。食べる。……あ、ダグラスさんは？」

確か、車の中まではいた、と思いながら視線を室内に動かすと、

自分の荷物と一緒に見たことのあるリュックサックが目に入る。ここまで一緒に来たことは間違いない。

再びジャックに視線を戻すと彼は少し不機嫌な顔になり、アリシアのほうを見た。

「二人で出ていったのに、一人で帰ってきたよな」

そのセリフはアリシアに向けられたものだった。どこか棘がある物言いにジェインは眉根を寄せた。

「知り合いと会って、どこかに行つたみたいだ。すぐ帰ってくるだろう」

アリシアは淡々と答える。不信感丸出しのジャックのセリフに慌てた様子はまるでない。ジェインは、少しだけほつとして、彼女の言葉を信じることにした。

「じゃあ、先に食べる。……ね、何かあるの？」

ジャックの顔を見ると、彼は慌てて笑顔になり、ベッド脇のテーブルの上の紙袋を抱え上げる。そして、部屋の中央にあるテーブルにそれらを並べていく。大急ぎでパンにソーセージにチーズ取り出すと、何か飲み物を貰ってくる、部屋を出ていった。

ばたんと閉まったドアをしばらく見てから、ジェインはアリシアの方を向いた。

「アリシアさんも、どうですか？」

一人ではとうてい食べ切れない量だ。というか、四人分以上あるような気がする。

「少し、貰おうか」

「はい」

ジェインはにっこり笑って返事をする、ベッドからするりと降りて、自分の荷物をあさった。取り出したのは小さなナイフだ。それを持って、テーブルまで移動し、紙袋の上にパンを載せた。

本当は何か野菜が欲しいところだが、贅沢は言えない。

適当な厚さにスライスしたパンでソーセージやチーズを挟む。あとは、ジャックが飲み物を持ってきたら完了だ。

「何も訊かないんだな」

アリシアは呟くように言った。

視線を向けると、準備が整ったのが判ったのか、壁際の椅子から立ち上がってその椅子を持って歩いてくる。

ジェインは少しだけ笑ってみせた。

「逃げなきゃダメって聞こえました」

家を出る時に着替えを持っていくようにと言われたこと。車の中での会話。それらを思い出す。「逃げる」ということが、現実とうまく結びつかなかったから、確かめるのはダグラスが戻ってきてからにしよう、なんとなく考えていた。

「その理由は、知りたくないのか？」

テーブルの横に椅子を置いて、彼女は座り、出来上がったサンドウィッチに手を伸ばしながら、さらに質問をしてきた。

ジェインは俯いて小さく首を横に振る。振ってから、口を開いた。

「……知ってたほうがいいことですか？」

「知りたくても、教えられないこともあるな」

アリシアは苦笑する。

「訊かれると困ると思っていたのに、何も訊かれないから、不思議に思っていた」

教えられないこと。

ジェインはちよつと安心する。多分、自分はそれを無理に聞き出すことはしないのだ。いや、できない。だから、はっきりと言ってもらえてとても助かった。

ジェインはまたもやうつむいたまま首を左右に振った。

それからアリシアをまっすぐに見た。

「私が、知らなくちゃいけない時がきたら、教えてください」

サンドウィッチを口に運ぼうとした手が一瞬止まり、アリシアは小さく、だが力強く肯いた。

「判った」

アリシアの返事とともに、ドアが開けられた。

カップを四つ載せたトレイを持ったジャックが、ちょっと真剣な顔をしてカップを見たままの状態が入ってくる。

「あ、お帰りなさい」

ジェインは慌てて近寄る。ジャックの家は宿屋だ。彼は家の手伝いもするから、不慣れなことではない。が、よく見れば、カップにはなみなみとお茶が注がれていて、今にもこぼれそうな状態だ。

「うん。ドア、閉めて」

「うん」

ゆっくりゆっくりと部屋の中央のテーブルへと進む彼の邪魔にならないようにドアに近づき閉めようとすると、そこへ丁度ダグラスが帰ってきた。

「……あれ、罰ゲームか何かか？」

あれ、とはジャックのことらしい。

なんと答えたものが困ってジャックとダグラスを交互に見ていると、ようやくテーブルの上に載せて一息ついたジャックが振り返って睨んだ。

「おっさん、うるせーよ」

「カップを四つと、お茶を入れたポットにしてもらえばよかっただろっに」

「さつき、後悔したとこだよー!」

ジャックは真っ赤になって叫ぶ。

「あー……、すまん」

あまりの状態にダグラスもからかうのをやめることにして、素直に謝った。

「謝るんじゃないっ!」

さらに叫ぶ。

ジェインが思わず吹き出した。

それを見て、ダグラスは、ポンと、ジャックの頭に手を載せた。

「良かったな、笑ってもらえたぞ」

「うるせえ!」

頭の上に載せた手が払われる前に離し、ダグラスはポケットに手
を突っ込んだ。

「ジェイン、これ、おみやげだ」

小さな革製の袋を差し出され、ジェインは思わず受け取った。

受け取ってから、ちよつと照れたように笑う

「さつきその露店にあつたからね。日ごろのお礼」

「あの。開けてもいいですか？」

お礼と言われても、普段、大したことをしているわけではない。

かと言って要らないともいえない。…というより、ジェインは素直
に嬉しさを感じていた。だから、早く中が見たくてじつとダグラス
の顔を見る。

「どうぞ。そんな大したものではないけどね」

照れ笑いから苦笑に変わり、ダグラスは逃げるようにして、アリ
シアの背後を回って移動してテーブルの上のサンドウィッチに手を
伸ばした。

ジェインは袋の口をゆるめると、中を覗き込んだ。ランプの光に
少し反射して何かが光る。指を入れて取り出すと、ペンダントだっ
た。ペンダントトップには何かが彫られた金属の小さな板に緑色の
石が埋められている。可愛いと言うよりは、不思議なデザインと深
い緑の色に目が吸い寄せられる。

「おい、おっさん」

立ち直つたらしいジャックが呆れたような声を出す。

「どういふセンスしてんだよ」

「いいんだよ。これは、お守りなんだから」

ダグラスは面倒くさそうにジャックの相手をする。が、その言葉
と表情はどこか胡散臭い。

ジェインは、手のひらにペンダントトップを載せてひたすらじつ
と見つめていた。

緑の石は濃い深い色。鋼色の金属は鈍く光り重そうで、実際に、
見た目の大きさよりもずっしりとしている。小さな穴に通された革

紐は、だからか丈夫そうに太い。

「ダグラスさん、ありがとうございます」

ぎゅっと握り締めて、見上げて礼を言う。可愛いと言うよりは不思議なデザインだが、その不思議な感じが気に入った。

「あ、ああ……」

ダグラスはぽかんと口を開けてなんとか返事をした。横でじゃれていたジャックも思わず動きを止める。

ジェインは知らずにこにこと微笑みながら、そのペンダントを早速首にかけた。

「翡翠だな」

サンドウィッチを食べ終わったアリシアが、ジェインの胸元を見ながら言う。

「え？」

「その、緑色の石。ちょっと色が濃い目だが、間違いないだろう。良いものを貰ったな」

「え？ あの」

ジェインは急に不安になって、ダグラスとアリシアの顔を交互に見る。もしかして、随分と高価なものなのでは、と急に不安になったのだ。

「大丈夫。そんな高くないから。……っていうか、プレゼントされた本人の前で言うのもなんだけど、安物だから、気にしなくていい」
ダグラスは苦笑してみせた。

「でも、翡翠とは驚きだ。こんな色、あるんだな。もっと薄い色だと思っていた」

「そんなに多くはないらしいが、たまにある。……ジェイン、それは、服の中に入れて肌に近い場所に置いた方がいい。外からは見えないが、お守りとしての効力はその方がある」

肯きかけて、でもジェインは躊躇した。服の中に入れたら、デザインが見えなくなってしまう。それはなんだか淋しく感じられたのだ。

「アリシアさん、詳しいんですね」

ぎゅっと胸元のペンダントトップを握って、とりあえず、思いついたことを告げる。

と、アリシアは軽く首をかしげた。

「石のこと。見ただけで判るんだな、って」

その顔がわずかにほころんで、彼女は服の下からペンダントを取り出した。

小さな緑色の丸い石に穴が開けてあり、革紐を通しただけの簡単なものだ。

「あ、その石」

「同じ翡翠だ。母の形見で、ずっと身につけている似たような色合いの石を、親指の腹でさする。」

「最初は、私もこれが翡翠だとは判らなかつたんだ」

「アリシアさんも、お守りに？」

問うと、小さくうなずいた。

「これのおかげで、すごく助かった」

ジェインは、その顔を見つめた。どこか目を逸らせない表情と口調で、きつぱりと言いつ切る。

「私も、そうします」

ぎゅっと握っていた金属は少し生暖かくなっている。それを服の中、下着の上に落とした。

それを見て、彼女はまた、小さくうなずいた。

それから、と言って、アリシアは部屋の隅に行き、自分の荷物を
ごそごそと漁ってからジェインの前に戻ってきた。小さな紙の箱を
持っている。

くすんだ赤い色の箱は、戻ってきたアリシアの手によって、ジェ
インの右手に乗せられた。

見上げて問うと、少し緊張したような面持ちの彼女は「博士へ渡
して欲しい」と言った。

ジェインは混乱する。

「アリシアも祖父を探すのではないか？」と。

それは、急に現実が押し迫ってきたように感じられたことでもあ
った。

今朝まではごく普通の日常と同じだった。それがいきなり違うも
のになった。起こったことが現実ではなかったなどとは思っていな
い。ただ、自分は巻き込まれるまま流されるままで、今までは考え
る余地がなかったのだ。

先ほどのアリシアとの会話の時も、それは変わらなかった。

おそらく説明をしてくれるだろうダグラスはその場にはいなかった
し、すぐにでも出発という雰囲気でもなかった。

だから、なんとなく、まだ先だと思っていた。まだ先のことだと
思っ、自分で自分を落ち着かせていた。

でも、違つと、そうではないと、目の前の女は言っている。情け
容赦なく、これから行わなければならないことを、突きつけてくる。
ジェインにはそんなふうにも感じられていた。

押し寄せてくる不安から、助けを求めるようにダグラスを見つめ
ると、彼は小さく肯き、口を開いた。

「おそらく保険だろう」

保険。心の中で呟きながらアリシアに視線を戻すと、彼女も肯い

た。

「急を要することだ。私も早く見つけるように努力するが」

ジェインは、うつむいて手のひらの箱を見つめた。

肯けば、始まってしまおう、と思った。

思ってから、それは違おうと気づく。

もう、始まっているのだ。

知らず、服の下のペンダントを握った。

握って、一度ぎゅっと目を瞑ってから開いた瞳で、ダグラスを見た。

「ダグラスさん。一緒におじいちゃんを探して貰えますか？」

見つめた先の男はわずかに目を見開いた。

やっぱり、とジェインは思う。そして言葉を探す。

「私一人ではおじいちゃんを探すのも、逃げるのも無理だから」

お願いします。と続ける。

「うん、そのつもりだよ。ジェイン。一緒に行こう」

ダグラスは柔らかく微笑む。それに笑みを返して、一旦手の上の箱を見てからアリシアの方をへ視線を移す。

「これ、絶対におじいちゃんに渡します」

「ああ」

アリシアがほっとしたように肯いた。

目の端にぐつと歯を食いしばっている赤毛の少年の姿が映る。それはダグラスをいたたまれない気持ちにさせた。

この場で会話に参加できない存在であることを、彼自身、誰よりも判っている。そして、誰よりも参加したいのだ。

ダグラスは気づかれないようにそつと息を吐いた。

連れては行けないことは、判りきっていることだ。

でも……と、連れて行くための理由を探す自分に、心の中で苦

笑する。

ジャック側の理由を横に置いて、自分に荷が勝ちすぎるのだ。それに加え、疑問は増すばかりだ。

アリシアは、二三日間はここで過ごしてから、デイルを探しに行くなり逃げるなりしろと言う。あの家に戻ることと、アリシアと一緒にいることが問題なのだから、別行動をとれば問題ないと言う。だが、ダグラスにはそれはいまひとつ信じられない話だった。

アリシアの話が本当なら、あの男達はあの家からではジェインを特定できない、という話になる。そしてアリシアと一緒にいない限り、特定されない、という話になる。

そんなバカな、と思う。

隣の家まで随分離れているとはいえ、完全に孤立して生活しているわけではない。ジェインは学校にも行っている。写真だつてどこかにあるだろう。

家を捨てて逃げなければならぬほど切羽詰まっているこの状況で、こんなに暢気に長時間同じ部屋に一緒にいることは、危険ではないのか？ と、思わずにはいられない。いくら、この宿には三人と一匹しま泊まっていけないことになっていても、だ。

アリシアは、大嘘をついているわけではないのだろう。が、ところどころ発言に矛盾があるのが気にかかる。

気にかかるのはジェインもだ。

ダグラスはサンドウィッチに手を伸ばしながら、先ほどの会話を反芻する。

ダグラスさん。一緒におじいちゃんを探して貰えますか？

このセリフは、ダグラスではなくジェイン自身が隠れなければならない身であると、知っているからではないのか？

状況が状況だから、自分のせいだと彼女が思ってしまう可能性もあるだろう。だがそれなら、何故もつとためらわない？ 彼女の性格なら、自分に助けを求めることに躊躇するはずだ。……少なくとも、今朝までのジェインなら。

どこかおかしい、そう思わずにはいられなかった。

「ジェイン」

サンドウィッチを食べ終わり、お茶に手を伸ばしながら腕時計に目を走らせる。そろそろ約束をした時間だ。気持ちを切り替えて、しなければならぬことを、実行することにする。

「はい」

ジェインはまっすぐな瞳を向けてくる。

「いまさらの話だけれど、しばらくあの家には帰れないことは判っているね？」

少しだけ不思議そうな顔をして、少女は肯く。

「彼女が言うには二年だそうだ。その間の、準備が必要だろうか？」

「準備なら……」

ジェインはチラリと自分の荷物に目を走らせる。

それに小さく肯いて。

「でも、二年分じゃないだろうか？ だから、旅慣れている知り合いに、どういった準備をしたらいいか話を聞こうと思うんだ。俺も詳しくはないからね」

「あ、はい」

少し納得したように肯く。

「昔、勤めていたときの後輩なんだが、若い女性だから話しやすいと思う。いろいろ訊いて、必要なものがあつたら、この数日の間に揃えよう」

「はい」

ようやく理解できたというようにしつかりと肯いた。

「いつ頃になる？」

訊いてきたのはアリシアだった。

「そろそろだと思うが」

「なら、そろそろ出ることでしょう」

祭りの最高潮は午前〇時頃だが、既に街は人出で賑わっている。これからどんどん増えていく今の時間に出かけるのは得策だろう。

「遅くとも二三日したら、俺達も出る。とりあえず、被らない方向へ向かうつもりだが、どう行けばいい？」

問うと、アリシアは少し考えるように唇を閉じた。

答える気があるのか、無いのか。ダグラスは、彼女の様子を窺う。

「西へ」

簡潔な返事に、目で問う。

「私は西へ向かう予定だ。それ以上は伝えられない」

「判った」

立ち上がり、右手を差し出す。一瞬いぶかしむようにその手を見てから彼女も自分の右手を出した。

互いに軽く握りあってから、ダグラスが「ありがとう」と伝えると、彼女の瞳に迷いが浮かんだように見えた。

それを見なかったふりをして、再度腕の時計を確認すると、「あの」と声をかけ、ジェインが慌てて彼女に寄った。

「私からも……ありがとうございます」

「いや……」

首を横に振り、わずかに辛そうに瞳を揺らす。

ジェインもそれに気づいたのか、少し表情を曇らせた。

それを振り切るように背を向けて壁際の自分の荷物をとると、左肩に引掛ける。

「無事を祈る」

ドアを閉める直前に、そんな言葉がようやく聞こえた。

きれいな人だな、とジェインは思う。

ダグラスの知り合いだという、女の人だ。柔らかな金色の髪は巻き毛で、ブラウンの瞳が人なつこい色で。きつちりスーツを着た姿は、線引きをされたように思えた。

でも、ダグラスが自分のためにと彼女をここへ呼んだことは判っているので、あからさまな態度をとることはできない。自分のためではなくても、ジェインにはそんなことはできないが。

せめて、マックスだけでもいてくれたら……と心の中で涙する。

ジェインは、基本的に人見知りだ。初めての人との会話には労力を要する。それに加え、ダグラスの紹介というキレイな女の人ということで、どう対応して良いのかが判らない。

だというのに、ジャックがマックスを連れだしたのだ。朝からずっとこの狭い部屋に閉じ込めていたのだから、当然のこととはいえ、心細くて仕方ない。

ぎゅっと両手でスカートを握り締めるようにしたまま動けずにいると、彼女はにっこり笑ってゆつくりと近づいてくると、ジェインの目の前でしゃがんで視線を合わせた。

「こんばんわ。はじめまして」

右手をさし出されて、ジェインも慌てて手を差し出した。

「はじめまして。……あの、よろしくお願いします」

「はい。よろしくお願いします」

彼女は、嬉しそうに目を細めて、右手を少し力を込めて握ってくれた。ジェインは少しだけ落ち着いたような気になる。

「さっそくだけど、まず、荷物を見せてもらっていいかしら？」

小さく首を傾げてみせて、彼女は言う。

「はい」

ジェインはリュックサックを持って、荷物を一つずつ取り出して、

テーブルの上に並べ始めた。

彼女が来た理由は、ジェインには判っていた。ダグラスは、長期の旅のための準備のため、と言っていたが、要するに女の子が男性には相談できないようなことの問題だ。……というのは、去年、ジャックの母親にいろいろ教わったからピンと来たのだが。

祖父は、ジェインの両親が居なくなってから、男手一つで彼女を育ててくれていた。その際、近隣の人々の手もちろん借りているジャックの母には、これから迎えるだろう初潮の話や、その際の当てなどをこまごまと教わっていた。この先二年も家に帰れないというのなら、その間に始まるのかもしれない。そうなった時のためにの予備知識を、ということだ。

ダグラスがそこまで考えたと思うと、なにやら恥ずかしい気がしてくる。と、同時に、本気で一緒に逃げてくれるということだと判って嬉しい。

「これは？」

時々、中身がすぐに判らない状態のものの説明をする。一通り聞き終わったパティは、溜息をついた。

「え？ あの」

「あ、ごめんなさい。ちょっと驚いちゃったの」

パティは舌を出して首をすくめて笑ってみせた。

「ちゃんとした荷物だったから。どなたかに教わったの？」

「はい。おじいちゃんに。……あと、ジャックのお母さんに」

「言うと、パティは「うん」としつかりと肯いてくれた。」

「そっか。スゴいわ。本当に。…あとは、この二つを足せば完成ね」
まるで自分のことのように、嬉しそうに微笑んで持ってきた荷物を「ごそごそとあさる。」

「これがなくても、ジェインの用意した荷物で完璧よ。でも、あると便利だから、持っていったらいいとおもっの」

パティは、ふふつと笑った。

パティが取り出したのは、小さな瓶に入った錠剤だった。

「生理痛止め。要らないかもしれないけど、もし辛かったらなかなか相談できないだろうし、すぐに入手できる場所にいるとは限らないから、持っておいた方がいいわ。これって、そんなに辛い人とは思いつかないのよね。それから、もう一つは」と、取り出されたのは小瓶。

「どんなのがいいか迷ったんだけど」

と言つて、小瓶の蓋をあけ、ジェインの手首をとると、その内側に触れさせる。

立ち上がるやわらかな香り。

「香水……？」

「そう。これはね、おしゃれのためじゃないの。この先、シャワーを浴びられなくてイヤな気持ちになることがあると思うの」

フローラル系にして正解、とパティは微笑んだ。

「自分じゃ判らないと思うのだけど、付け過ぎはダメ。香水を付けているのが他の人にも判らないくらいでいいの。これは、ニオイ消しのものではないから。もちろん、シャワーがダメでも、体はちゃんと拭いて、清潔を心がけてね？」

確かに、祖父からは大まかに女の人の体のしくみのことを聞いたし、近い将来必要になるからとジャックの母親からも、手当てのこととは聞いていた。だが、目の前の女性は、自分の実体験から教えてくれている、と感じた。

「ありがとうございます。……あの、パティさんは、よく旅に行くんですか？」

握らされた瓶を二つ手に握り締め、ジェインは訊ねてみた。

「ええ。仕事で。世界各国を回ってるわよー」

半ば苦笑するように彼女は言う。

「こっちにいるのは、一年のうちの半分くらいかな」

「じゃあ、ダグラスさんも？」

そう問うと、彼女はにっこりと微笑んだ。

「そう。だから、基本的なことは彼に聞くといいわ。でも、男の人って、しょせん男の人なのよ。女がどんなことがイヤと思うかなんて説明してもなかなか理解してもらえないのよね」

少し頬を膨らませてそう言うのに、ジェインは小さく笑って肯いた。

確かに、ジャックや祖父にはなかなか伝わらないことが多い。特に祖父は、三日風呂に入らなくても死なない、と言う。死ぬとか死なないとかそういう問題ではないのに。

「あとね」

パティはさらに楽しそうに微笑む。

「ジェインは、ダグラスのことが好き、ね？」

「え……」

ジェインは、彼女の唐突な言葉の意味が一瞬判らなかつた。びっくりして、それから次の瞬間に理解してから、真っ赤になる。

「ふふふふー」

パティはにっこり笑う。が、焦ったジェインは言葉が出ない。

「え、あの……そうじゃなくて」

「誤魔化してもダメ。ライバルには判っちゃうのよ」

どきん、と胸が鳴った。

じつと見つめるジェインに、パティは視線を合わせる。

「だって、最初に会った時、面白くないって顔に書いてあったもの」

「えっ」

「でも、心配しないで？ 私と彼とはなんにもないの」

パティは、再び身をかがめてジェインと視線を合わせて言った。

「ジェインもね、自分が子供だからなんて思っちゃダメよ？ もちろん私も諦めるつもりはないけどね」

真剣な瞳で。

「でね？ この先、イヤなことはたくさんあると思うの。そんな時にはね、もう一緒には居られない、と思うかもしれない」

パティは一呼吸置いて、残酷な現実をつきつける。

「彼は、自分が子供だから一緒にいるのだ。彼は、義務だからこの二年一緒にいてくれるのだ。……って」

まったく考えなかったわけではなかったが正面から見ることを避けていたことだった。

「でもね、それに耐えなさい」

「え」

「あなたはこの二年間を生きなくてはいけない。絶対に。そのために、彼は今動いている。その努力を無にしてはダメ」

絶対に、と再び言い添える。

「自分がいなくなれば、彼が楽になるとか考えてはダメ。あなたがなくなったら、彼は探すわ。とても心配するわ。それは判る？」

うなずけないまま、ジェインは彼女を見つめる。

多分、ダグラスだけではないことを、ジェインは知っていた。ここまでついてきたジャックも、自分が原因だと言ったアリシアも、そしていなくなった祖父も、自分のことをなにがしか考えていてくれている。

「迷惑をかけたくないのなら、離れないことが一番の方法だってこと」

いつか恩返しをしたいのなら、彼に直接でなくてもいいと思うの。困ってる人を助けてあげて？

パティはそう言うとき少しだけ泣きそうな顔で微笑んで、体を起こした。

その後は、旅に出るにあたってのこまごまとした注意点を話しはじめた。

どれくらい経った頃だろうか、ドアが開いたので彼は、読みかけのデイルの日記を閉じてそちらに視線を向けた。廊下に腰を下ろした状態のまま見上げた先には、一歩だけ部屋から出た後輩がいて、目が合う。彼女は目を丸くして、そのまま動きを止めていた。

「どうかしましたか？」

中からジェインの声が聞こえてきて、再び動き始めるまでの数秒、彼女はただただあきれたようにダグラスを見ていた。

「何でもないわ。じゃあまたね」

まるで、そこに彼がいることを気付かれたくないかのように急いでドアを閉める。笑顔を貼り付けたまま、彼女は、ダグラスの片腕をつかんだ。

「ちよつと来てください」

体をかがめて、ダグラスの耳元でささやくように、けれど有無を言わさぬ調子で言う。

「え？」

とつさに意味が判らなくて聞き返すのを無視して、彼女は部屋の入り口が見える廊下の端までずんずんと引つ張っていった。

「……なんで、話のきこえる距離にいるんですか」

険しい表情で彼女は言う。

それならば、室内にいてくれたほうがマシだったと、付け加えて。

「いや、聞こえなかつたし」

パティの怒りが何によるものか見当もつかず、ダグラスはとりあえず説明を試みる。

「そういう問題じゃありません。私とあの子はなんのために二人つきりで部屋にこもったのか、理解しているのか、って訊いているんです」

「や、だから」

「もし、あの子があんなところに座っているあなたを見たら、どう思うと考えてるんですか」

もし、ジェインが見たら。

そう言われてようやく思い至った。

女性同士二人つきりの方が話し易いだろうとわざわざ手配して、声が聞こえるかもしれない距離で待っている男…。

「先輩って、むっつりすけべだったんですね」

言葉を無くしたダグラスにパティは容赦ない。

「え、だから」

「女の子の信用を壊さないでください。この先の二年、一緒に過ごすんですから」

「……すまない」

ようやくダグラスは謝った。

「考えが足りなかった」

パティもようやく表情を緩めた。

「判ればいいんです」

どこか上から目線な態度と言葉でそう答えて、パティは少しだけ苦笑した。

「……あの子、いい子ですね」

「……ああ」

ダグラスは肯いて、日記を持つ右手に少しだけ力を込めた。

日記は、六年前から書かれていた。毎日ではなく、特定のことの特化して、何かが判った場合のみ書かれているようだった。とはいえ、その量はなかなかの分量で、まだ三分の一も読み進められてはいない。

だが、何について書かれているのかは、数ページ読めば理解できた。

「驚きました。彼女の荷物は、ほぼ完璧です」

パティは驚いたというよりいぶかしんでいるようだった。

だが、ダグラスは、そうだろうな、と思った。

その様子を注意深く見ていた彼女は、眉根を寄せる。

「もし、手に負えないと思ったら、連絡をください。力になります」
ダグラスは肯く。

「ありがとう」

気持ちだけでも嬉しい言葉に礼を言う。本当に助けを呼ぶかどうかは判らないが。

ダグラスの表情を見ていた彼女は小さく首を左右に振った。
それからおもむろに腕の時計を見た。

「……先輩？ ジャックくん、遅すぎませんか？」

「……そうだな」

出かけてからもうそろそろ一時間にもなるうとしている。

マックスの排泄に出ただけのはずなのに、一時間以上もかかっている。

いくら人ご込みの中に出ていったとはいえ、遅すぎる。こんな時にゆっくりのんびりはできないし、するような性格もしていない。
「ちよつと探してくる。パティは部屋に戻って、ジエインといてくれないか」

言っと彼女は返事をして、すぐに部屋へと向かっていった。

ジャックは道に迷っている…というより、人に流されて中央の公園まで来てしまっていた。しかも、祭壇から結構近い位置で、よくこんな隙間が残っていたなと、不思議に思うような位置だった。

唯一の救いは、マックスが傍らにということと、大人ばかりでなく子どもも多いので、犬を連れて歩いていても、周りが配慮してくれるということ。

ジャックは身動きがとれずただ流されるままの状態で、マックスから離れないように背中 hands を置いて移動していた。

ようやく動きが止まっても、今自分がいる場所が公園のどのあたりか判らないので、きよるきよるして、現在位置と退路を探す。

その様子を不審に思ったのか、すぐ後ろにいる男が声をかけてきた。

「坊や、どうしたんだい？」

「ちょっと流されてここまで来ちゃったからさ、どうにかして公園から出られないかと思って」

見上げると、人の良さそうな男と目が合った。人の良さそうな顔立ちで、目を細めて笑んでいる。

「君は、祈りの子どもになりたいわけではないのだね？」

男は少し驚いたように言ってから、ふむと思案顔になる。

「そっちの大きな犬は、君の連れかい？」

「うん」

「そうか。その犬がいなかったら、私が君をかついで外まで行くこともできるが、それは難しそうだね」

ジャックは肯く。自分一人でもそんなに軽いわけではないのに、四〇キログラムを超える犬と一緒に担いでいくのは難しいだろう。

「君は、本当にいいのかい？」

「うん、まあ…」

マックスの排泄が目的で、それがまだである、ということはないか
なかないづらい。このままここでさせるわけにもいかないし、とに
かく、人込みから逃げ出さねばならない。

「では、右手を出して。左手はその犬をしつかりと持って…」

言われるがままに、右手を出すと、しつかりと握られた。

「手をつなぐから。離してはダメだからね」

「え？ おじさんはいいの？」

「この年じゃ、祈りの子どもに選ばれるわけではないからな」

じゃあ、何のためにこんなところに居るのだろう。子どもがいる
なら、引率者と思っと思えないことはないが、子ども連れでないの
なら、ここにいる意味は？ と、そんなことを思う。

男は、器用に対面する人たちとくるりと向きを変えながら歩く。

ジャックは、置いて行かれないように、必死で握られた手に神経
を集中した。

「祈りの子どもに選ばれた子どもには、願い事が適うと言われている。
君には願い事もないのかな？」

やわらかい笑顔で言われて、ジャックは首を傾げた。

「願う事はあるけど、そのために祈りの子どもに選ばれるのは違うと思うんだ」

もともと、神頼みというものいま一つ理解できない彼としては、選ばれたら願う事がかなう、というのも理解できない。

男は、わずかに眉を上げて、目を見開いた。

「つても、大声で反対するつもりもないけど」

「うん。そうだね」

急いで付け加えた言葉に、男は淋しそうに肯いて、その後は黙ったまま、流れと逆行していった。

そして、ようやく公園を出て、通りの端に辿りついた。じつと立ち止まってさえいれば、その位置を保持できる場所に落ち着くと、男はジャックに少し待つように言くと、壁に沿って移動をして姿を消した。

ジャックは、マックスを壁際に立たせ、その前に守るように壁に両手をつけて立つ。ときおり自分を見上げるマックスに「もう少しのガマンな」と声をかけながら、流れを見やる。

公園中央の祭壇に向かう人々のうち何人が、わが子が祈りの子どもとして選ばれることを、本心から願っているのだろう。ジャックには、ほとんどが、一二年に一度という祭りの物珍しさが足を向けさせているようにしか思えない。その証拠に、子連れは思ったほど多くはない。

「今度の卵の持ち主は……」

ふとどこからか聞こえてきた声に耳をそばだてた。

「まだ判らないらしい」

どうやら、少し先の門を曲がったところに誰かいて、話をしているらしい。

「……遅いな」

「ああ」

「卵の殻はどうだ？」

「それは、見つけた。でも、そっちもおかしい」

意味は判らないが、深刻そうな声音に興味がわいた。

「一つところにじつとしていない」

「ありえないだろう」

「だから、卵がみつからない」

「そうか」

「本来、卵の殻は、卵から離れていられないはずなんだ」

「……ああ」

『卵』？ 『卵の殻』？

耳慣れている単語なのに、何か別の意味を持っているように使われている言葉だった。

もう少しよく聞こうと、半歩だけ声のする方へ動いた時、「やあ、待たせたね」と背後から声が出た。男が戻ってきて、背中の方から声をかけてきていた。

「これを」

男はふところから、どこかで見たことがあるようなものを取り出した。

「あ、……お守り……？」

ジェインがダグラスから貰っていたのととても似ている形のものだ。

「よく知っているね」

男は目を細めて笑う。

「これを首からかけていなさい。服の下がいい」

「……どうして？」

ジャックは、不思議そうに問いかけてみた。

「これも、何かの縁だからね」

男は、ジャックの頭からそれを被せた。

「君みたいな子が増えることを願って」

意味が判らなくて目で問い返すと、にっこりと微笑まれたきりで、返事すら出てこない。

それでもと、礼を言うために口を開こうとした時、爆発音が聞こえた。

音は、公園広場の方からに思えて、ジャックはそちらの方を向いて目を凝らした。

ジャックの位置からでは、何が起こったのか判らない。ただ、それまでよりも大きなざわめきがどよめきになるのを感じていた。

呆然としていると、男は壁と自分の間にマックスとジャックを挟んで押し付けるようにした。

「人が押し寄せてくる。じっとしてて」

「お……おじさんは？」

ジャック自身もマックスを抱きしめるようにして踏ん張る。

「大丈夫だと思うけどね」

男が苦笑を漏らすと、人込みはそれまでとまったく逆の方向にむかって、それまで以上のスピードで動きだした。

子どもの泣き叫ぶ声。大人たちの「逃げる」と叫ぶ声。言葉にならない声。

それらが飛び交う。

それをジャックはじっと眺めていた。

大変なことになる。

なんとなく、頭の隅でそんなことを感じていた時だった。

通りの反対側の建物の上を何か動くのが見えた。それは、もの凄いスピードで屋根の上を駆けていた。淡い金髪の、長いスカートの女。

……………アリシア。

これがもし、今日のような祭りの日でなかったのなら、彼女だと気付くことはなかっただろう。

……………街灯だけでなく、いたるところにランプが並べてあって、街

中が明るくなっているような夜でなければ。

ジャックは、目を見開き公園の方へ向かって屋根の上を駆けている女を見つめる。

その様子に、男も振り返り、目を見張った。

だが、アリシアの姿はすぐに見えなくなった。

ひたすら目を凝らし、耳をすませて様子を窺う。何が起こったのか。

「何があっただろう」

ジャックの呟きに、男は視線を戻した。

その間も、男の背後では、たくさんの人たちが今にも倒れそうになりながら、広場から遠ざかるうとしてるのが見える。男は、背中に体当たりされながらも、体勢を崩さないように、ふんばりながら立っていた。

「爆発音がしたように聞こえたけど」

「うん」

ジャックは肯いた。

爆発したのは、公園広場のほうだと思えた。だから、それから逃れるために、人々はそれまでと逆方向へと急いでいる。

「君の知り合いの人とかは大丈夫？」

「たぶん……」

宿から出て随分になるから、探しに来ていたりすると問題だ。だが、なんとなく、大丈夫のように思えた。

気になるのは、アリシアのことだったが、それも、確かめようがない。係わり合いにならない方が互いのためのようにも思える。

「でも、なかなか帰らないって心配してたら……」

「そうか」

男は思案するように流れていく人込みを見つめる。

すると、その流れが止まった。

「止まった……？」

「うん。そうだね」

通りにいる人々からは、止まったことへの疑問や不安の声が出ている。

男はそれを固い表情のまま見つめていたが、小さく首を横に振った。

「なんだか、もう少しかかりそうだね」

「うん」

男が自分がしでかしたことのように申し訳なさそうに言うのがおかしくて、ジャックは笑いながら肯いた。

宿から道へ出ようとしたダグラスは、彼に何が起こったのか理解した。

ひしめく人間の多さは、夕方にロブと会った時の比ではない。おそらく、大通りの方はこれよりも酷い状況だろうと思われた。とすれば、彼は人の流れに乗ってしまったのだろう。

だとすると、公園まで行ってみるのが、見つけるためには一番良い方法だが、問題は連れて帰ってこられるか、だった。

無策に出かけて、二人と一匹でこの人込みの中に巻き込まれるのも問題だ。

一応、状況だけ報せてから出るかな。

黙って出かければ、残ったジェインとパティが心配するだろうと思えたので、一旦引き返そうと思ったその時、遠くで何かが爆発するような音がした。

「？」

耳を澄まして人の流れを見ながら様子を窺っていると、道端の屋台がいくつつか、人の流れに突っ込み、流れを堰き止めはじめた。

それは、一定間隔をおいて行われているようだった。ダグラスから見える位置と、そのさらに向こう、それから反対方向にも。

爆発音。流れの堰き止め。

無関係ということはないだろう。

ダグラスは、堰き止められて身動きがとれなくなった人たちをしばらく見てから、宿の中に引き返した。

ボタンと音がして、その人はまた戻ってきた。出ていったのは、ほんの少し前のこと。ジェインはきよんととして、にっこり笑顔を貼り付けるパティを見た。

「ごめんね」。ジャックくんがなかなか戻らないから、ダグラスが迎えに行くって言って、その間の留守番を頼まれちゃったの」

「ジャックが？」

そう言えばと思い出す。マックスが朝からずっと宿の中に居るからって、気を使って言い出してくれてから、もう随分と時間が経っている。

「ジャックくんは方向音痴？」

「そんなことは、ないです。それにマックスがいるから、大丈夫だとは思うんですけど」

「あの子、賢そうなものね」

「知っている場所なら、お使いくらいはできるから」

ジェインは少し誇らしげに言う。拾った時にはすでに成犬だったが、マックスは人が何か言うのを待っているようなところのある犬だった。祖父は、ちゃんと訓練をされた犬ではないか、と言う。人との関わりを持って育った犬でないと、そういう仕草は見せないと言うのだ。

「多分、宿までの道は覚えてると思うんです」

宿までの道というより、ジェインのいる場所、なのだと言祖父は言う。

マックスは、ジェインが拾って、ジェインが世話をしている。犬は家長に従うとよくいうが、マックスの場合は、一番は常にジェインだった。山でキャンプをしている時も、祖父がやみくもに連れ回して放しても、ジェインのいるテントに戻ってくる。普通なら、家

に戻りそうなものなのに。

「すごいわね」

パティは心底感心したというように目を丸くし、微笑んだ。
それから、ゆっくりと窓へ向かう。

「……人の数がすごいわ……」

呟いて、ジェインを手招きする。

窓を閉めたまま通りを見下ろすと、本当にすごい人で、ジェインは思わず息を飲んだ。

「原因は、これね」

と、遠くで爆発音がした。パティは窓を開けようと手を伸ばす。

「あ」

ジェインの声に、通りに目を向けると、何台かの屋台が人の流れを断つように通りに出てきていた。

「何が……」

「判らないけど、ちょっと大事じゆうだいになるかも」

ジェインは、パティの真剣な声の調子に思わずその顔を見上げた。

「ジェインは大丈夫。そうじゃなくて、祭りの参加者が。爆発音が聞こえたの。あれが公園広場で起きていたら」

その時、再びバタンと音がしてドアが開いた。振り返ると、ダグラスがいた。

「あ、見てるな。じゃあ話が早い。ちょっと俺も外に出てくる。すぐに戻らないと思うけど、ここで待っててくれるか？」

ドアを開けたままの状態では半分だけ室内に入れて、ダグラスは言った。

「判りました」

「はい」

「じゃあ」

短い返事を残して、ダグラスはすぐにドアを閉めて出ていった。

14 (後書き)

眠さをこらえながら書いてて、とにかく保存して、次の日同じファイルを見たらワケの判らない文章がありました。面白かったから、一つだけ紹介。

ジャックが男からペンダントを貰った直後くらい。

正 それでもと、礼を言うために口を開こうとした時、爆発音が聞こえた。

誤 それでもと、礼を言うために口を開こうとした時、「彼は以前勤めていた」

「彼は以前勤めていた」というのが、このシーンのどこをとっても誰とも繋がらない言葉で（しかもカギカッコでくくってるし！）、しばし悩みました……

15 (前書き)

決して忘れていたわけではないのですが、書き忘れておりました。

ここ数回（パーティが再びやってきてからは、夜です。外は暗いです。普段なら、街灯にはガス灯があるだけで、全然明るくありません。そんなんじゃない絶対に、通りの向こうの屋根の上を走る人間を見分けることができません。

なので、祭りだ祭りだ！とあっちゃこっちゃに明かりを灯してたんでしようねえ…。

ということ、ここ数回分にくっつか言葉を足しておきます。

2011.8.17 23時30分頃に初めて読まれる方にはほとんど関係ないことですが、一応お知らせいたします。

宿を後にして、ダグラスは壁に体をこすり付けるようにして、公園広場へ向かった。

ジャックが予想通り流されたのなら、そのコースを行けば途中で拾えるだろうし、最悪、公園広場で探せるだろう、と思ったからだ。もし、運悪く、通りの向こう側を彷徨っているのなら、行き違いになることも考えられるが、その時はその時だ。公園まで行けば、あの爆発音の謎も解けるだろう。そんなふうに考えながら進んでいた。

頭の隅にあるのは、デイルの日記の中身だ。

まだすべてを読んだわけではない。

が、何が起こったのかは理解できた。

水晶魚^{おつりいしうし}。

昨日の夜、ジェインが語ったおとぎ話。あの話を聞いた時には、ただのおとぎ話なのだと思ったのだ。

幼い娘と妻を置いて出て行った男のことを伝えるのを躊躇い、おとぎ話にすり替えて伝えたのだと。

が、事態が進むにつれ、その存在は大きくなっていった。思わず上司に言ってしまうほどに。

ジェインの父親が願ったのは、盲目の妻の目を見えるようにすることだった。

彼女は生まれてからずっと目が見えなかったわけではないらしい。だが、ジェインの父と出会った時には、もう光を失っていた。

ジェインの父が妻の目に光を取り戻そうと思ったのは、彼女が生まれてからだった。

可愛い、愛らしい娘。その姿を見せてやりたいと。

そして、家を出た。

しばらくして、ジェインの母は、目が見えるようになったらしい。だが、それも僅かな期間だったようだ。しばらくして、ジェインは母 サラを失う。

そこから、デイルは何が起こったのかを調べ始める。

日記は、日記の体裁をとりながら、事例の収集調査と考察、推論が綴られていた。

調べていくうちに判ったのは、水晶魚の卵は、決して願いをかなえるだけのものではないということ。

いくつかの例から共通点を拾えば、血縁者に女兒がいること。四年に一度かなえられていること。母親か姉が、新しい血縁者の女性が姿を消すこと。最終的にはその女兒も姿がなくなること。などという。

読みながら、ジェインのおかれている状況とも似通った点が多いことに気付いた。

そして、デイルはその頃から、ジェインにあらゆることを教える決心をする。

炊事、洗濯はもちろん、野宿のようなこともこなせるように。

定期的に避難訓練のようなこともしている。簡単な護身術も教えようとしていたようだ。ジェイン自身がなかなか思い切った動きができずに上手くいかない、などと愚痴めいたことも書いてあった。パティがほぼ完璧だというのも間違いない。

彼女自身は事実を知らされていないようだが、おそらく荷物はいつも用意してあったのだろうし、手際よく詰め込むことも慣れたものなのだろう。

だから。

そう繋げることには多少の抵抗はあったが、ダグラスはどこか確信めいて思っていた。

だから、この爆発も無関係な話ではないのだろう、と。

爆発でパニックに陥った人々により、大きな事故が起こらないよ

うにと配慮された、屋台を使った堰き止め。

併せてこれも、ジェインに何がしかの関係がある。そんなふう
に考えて進んでいた。

人の流れは、屋台が邪魔をすることによって、逆にスムーズに流れるようになっていた。

ジャックはそれを見るともなく眺めていた。男も無言のまま、人々を見ている。

と、またもや会話が聞こえてきた。

「さつき」

「ああ、見た。『殻』だ。間違いない」

何なんだろう。さほど大きな声で話しているわけでもなさそうなのに、やけにクリアにその二人の男の声はジャックの耳に届く。

「ってことは、この近くに『卵』が？」

「さあ、判らん。今回の『殻』は、どこがおかしい。さつきの、屋根の上もそうだ」

ジャックは身を硬くした。

屋根の上。

すぐに思い浮かんだのはアリシアだ。この人込みに乗じて移動すると言っていた。

「捕獲しなくていいのか？」

「連絡は入れたが、この人込みじゃ、追いかけるのも困難だ」
捕獲。

ということは、彼らはアリシアの敵？

「どうかしたの？」

ジャックの様子がおかしく思われたためか、男が声をかけてきた。それに対し、首を横に振る。

ジャック自身、アリシアを味方と置いていいのか結論は出ていない。実際、彼女が来なければ、こんなところにいる目に合うことなかったとも思う。それでも、彼女がジェインに害を与えるようには思えないのだ。

だから、見なかったことにしよう、と思った。屋根の上を走る彼女には気付かなかったことにしよう、と。

「もうそろそろ帰れるかな」

人の流れを見ながら、ジャックは呟くように言った。

気付けば、公園広場方向へは行かないように誘導している人が現れている。上手く人の流れに乗れば宿まで帰れそうな気がしてきた。「そうだね。その子もそろそろ疲れてきたみたいだし、いいかもしれないね。ゆっくりと歩いて行こうか」

「え？いいよ。俺一人で」

送っていいこうという素振りを見せる男に慌てて言う。そこまでしてもらおう義理はない。

それに、おそらくその角を曲がったところにいるだろう男達のことにも気になるのだ。

「な」

と、振り返りマックスの首を軽く叩いてやると、彼は「わふ」と息だけで吠えて返事をした。

「一人というより、立派な保護者みたいだけど」

と男は苦笑する。

「こんな状況だからね。大人の好意には甘えておいたほうがいい。そろそろ警察もやってくるし、消防隊もやってくるだろう。そうすると、また混乱するかもしれない。せつかく保護できた子が、目を放したあとで迷子になるのもなんだか納得いかないしね」

そこまで言われると、絶対にそんなことはない、とは言い難いジャックだ。

「じゃあ、お願いします」

あんまり強固に嫌がっても怪しまれると、ジャックは引き下がることにした。何かの拍子にアリシアのことを口走るなんてことは、すぐくありそうだ。

「……それにしても、上手くいったもんだな。ドミノ倒しみたいになるんじゃないかって、心配してたけど」

「またもや、声が聞こえてきた。」

「屋台だけならそうだったか。何人か、ペースメーカーを紛れこませてたから、上手く誘導できたんだろ。このためだけに、雇ったらしいからな。」

ジャックはその声の方を向かないようにするだけで精一杯だった。傍らにいる男には聞こえていないのかとか、爆発を起こしたヤツらだと気付いたとか、そういう男たちがアリシアをどうにかしようとしているとか、頭の中は混乱している。

「どうかしたのかい？」

混乱したまま動きを停止させたジャックを、男は心配そうに見下ろしていた。

「う、ううん」

何か言わなきゃとは思うが、何を言ったらよいのかも判らない。

歯を食いしばって俯いていると、男は腰を折り顔を寄せてきて、額に手を置いた。

「熱でも……」

言いかけた言葉が途切れた。

「酔狂なこつた」

やけに鮮明に響いたその声に、男は目を見開いて言葉を切り、曲がり角の方を見た。

「あ……」

焦るジャックの頭にぼん、と優しく手を乗せる。そして体を起こしながら、ジャックの頭に載せた手を背中に移動させ、前に押し出した。もう片方の手は、人差し指を一本、彼自身の唇の前に立てている。

男に背中を押されて一歩分移動すると、とたんに声が聞こえなくなつた。

「どっかで反響してるんだろうね」

さらに数歩歩いてから、男は言った。

「何か、怖い話でも聞いたのかい？ 顔が真っ青だ」

ジャックは俯いたまま首を横に振る。

「そうか。黙っているのも、一つの方法だからね。それもいい」

男の声はどこか柔らかく、ジャックは思わず顔を上げる。

「危ないことに自分から近づかないのも、賢いやり方だって話さ」

「またもや右手でポンポンと頭を叩く。その顔は優しい。」

「ジャック！」

聞いたことがある声が、自分の名前を呼んでいた。

そちらを向くと、壁と人垣の間わずかな隙間を縫うようにして

走ってくる人物がいた。

「あ」

「知り合いかい？」

ジャックは、男を見上げずにそのまま肯いて、ダグラスを見た。

彼はどンドン近づいてきて、ジャックが気にしている曲がり角も

普通に通り越して、目の前にやってきた。

「やっとみつけた」

息も絶え絶えといった様子で、荒い息の合間に言う。体を折り曲

げて両手を膝につき、呼吸をなんとか整えると、ジャックの背後に

いる男を見る。

「もしかして、こいつを助けてくださいましたか？」

「そうですね。人に流されて身動きがとれなかったようで」

男はにっこりと笑う。そして、そのままの顔で、だが笑ってない

瞳で言った。

「少しお時間をいただけますか？ お話したいことがあります」

まばら、とはまだ言えない程度には人はいたが、移動はかなり楽になっていた。

近くの屋台に、と言う男の話を聞く義理はなかったが、ダグラスはついて行くことにする。

同意を示すと、ジャックが不満そうな顔をして、マックスを目で示した。まだ、本来の目的を遂げていない、と訴える。

仕方ないのでダグラスが、申し訳ないがと、犬が排泄できるような所はないかと問うと、男は笑って、屋台の近くにあると告げた。

屋台の回りには椅子が何脚か置いてあり、座って食べられるようになっていた。その、空いている椅子について、ダグラスとジャックは飲み物を頼み、待っている間にジャックは示された空き地にマックスを連れていった。

「よく躡けられてますね。……あなたが？」

ジャックが空き地に連れて行き促すとマックスは排泄をする。それは、ジェインがいつもしていることだったが、ジャックの言うことも聞くとは知らなかった彼は、少しばかり驚いた。

「いえ、飼い主は別にいるんですが。……私も驚きました」

柔和な笑みを浮かべる男は、親しみ易い雰囲気を持っている。が、ダグラスは自身のことを「私」と言ってしまう。そのことに気付いて、背筋に力を入れた。

「本当に大人しい。彼も褒めていましたね」

「ええ。たまに、人の言葉が判るんじゃないか、って思うこともあります」

ダグラスは、意識的に、話してよいことと悪いことの線引きをする。

「あなたは、彼とは……？」

「今は、一応保護者ですね。知り合いの子どもと一緒に面倒を押し

付けられました」

苦笑をして説明をすると、男は思いのほか真剣な眼差しを向けてきた。

「祭りを見るために、保護者役を買って出られた？」

「みたいなものです」

ならば、と男は軽く息をついた。

「以後はもっと気をつけて」

このような夜に、子どもを一人で歩かせるようなことを言っていることは、すぐに察せられた。だからダグラスはすぐにならずいた。

「ええ。後悔しています。本当に、見つかってよかった」

男の目の色が少し柔らかくなる。

「私にも子どもがいました。ちょうどあの子くらいの年齢で……」

男は、こちらに戻ってこようとするジャケットを見た。

「女の子でしたがね」

おどけるように言って、少し口をつくむ。

「あんな感じの赤毛でした」

ダグラスは口を開きかけて、何も言葉が出ず、少しばかり逡巡した後に視線を下に向けた。

同時に、下手に言い訳をしなかった自分を褒める。すべてを語らずとも、その口ぶりから子どもを失ったことは判る。そういった相手に何を言い訳できるというのだろうか。

「……祭りは初めてですか？」

ふつと表情をあらためて、男は訊ねてきた。

「ええ。こちらの街へは八年ほど前に来たので」

「ならば、この祭りでの混雑はご存知なかったのでしょうか。きっと彼自身もすぐに戻ってこられると思っていたのでしょうか」

「いえ、それでもやはり、私の責任です」

ダグラスは首を横に振る。

もしこのままジャケットが何らかの事故に巻き込まれてしまっていたら、彼の両親に何と言ったらいいいのか。それを考えると背筋が凍

る。

「次に同じような場面があったら気をつけたらよいのです。今は、無事に保護者のかたと出会えたことの幸運を喜びましょう」

男は話を打ち切るように言っ、こちらにやってくるジャックを見た。

彼が椅子に腰を下ろすのを待つ、男は口を開いた。

「あなたたちは、この祭りの意味を知っていますか？」

「意味、ですか？」

ダグラスは、ジャックと顔を見合わせた。

「祈りの子どもを選ぶ、って」

ジャックは呟くように言う。言うが、そのことの意味までは考えたことはない。

「そう。十二年に一度の大祭、と呼ばれていますが、私たちにとっては、公園広場に集まって、子どもの中から十二人を祈りの子どもとして選ぶ、それだけです。神殿側では、もつといるんな祭事が執り行われていますが、公開はされていませんしね」

男はジャックの方を見た。

「ジャックくん。さつき君に渡したお守りを出してくれるかい？」

「あ、はい」

「……何か貰ったのか？」

言われて服の下から何かをこっそりと取り出そうとしている少年に訊くと、彼は肯く。

取り出されたのは、ジェインに渡したものと似たようなデザインのペンダント。

それを首からも外そうとするのを男は留める。

「そのままでもいいよ」

そして、いつの間に取り出したのか、またもや似たようなデザインのものを取り出した。

「あの、これは……？」

「こちらは、神殿のシンボルです」

男が指したのは自身が取り出したものだ。よくよく見れば、丸い何かが彫られた金属の板にはめられているのは、透明な石だ。ジャックが首からさげているのは、ジェインと同じ緑色の石。

「え？　でも神殿のマークは違いますよね？」

ダグラスは自分の記憶をひっくり返しながら言う。世界各国にある神殿は、統一のマークを掲げている。円に星を重ねたようなものだ。

「ええ。あちらは表向きの、と私は解釈しています」

男はにつこりと笑う。が、ダグラスはこのままこの場で話し続けて良い内容なのかと緊張する。

「大丈夫です。そんなに隠されたことはありません。これは、祈りの子どもに選ばれた子が、神殿から渡されるものの複製なのです」
なら。と、ダグラスはジャックが手に持っているほうを見る。これは何だ？

「この大祭の意味は、健康な子どもを十二人選ぶことです。こちらのペンダントはその目印です」

「目印？」

「ええ。私は、あまり良いものではない、と考えています」

目の前にいる男は、あくまでもにこやかな笑みをたたえている。まるで、他愛の無い世間話でもしているような雰囲気だ。だが、実際にしている内容は、こんな誰が聞き耳をたてているか判らないような場所です。いい話とは思えない。

ダグラスのその気持ちを察したのか、男はくすりと笑った。

「大丈夫です。この回りに座っているのは、みんな知った人間です。私たちの声は、その向こうには届いていません」

この回り、と言われ、ダグラスは辺りを見回した。無造作に置かれた椅子に座っているのは、老若男女取り揃えられていて、不自然さは無い。

だが、それならそうと早く言って欲しい、という気持ちもあった。男はそれも察したのか、申し訳ない、と続けた。

「時間が余り無いので」

言われて、ダグラスは腕の時計に目を走らせた。あと一時間ほどもすれば日が変わる。

「ええ。儀式まであと一時間です。その間に、神官たちは目星をつけた子どもたちはこのペンダントを渡します。……本来なら、公園広場で行われますが、今回は何かがあったようで、公園広場には人は殆ど残っていないようですから」

男はそこで言葉を切り、ジャックにペンダントをしまつように言い、自分が持っているものも懐にしまった。

「よく判らないのですが、爆発があったようですね？ そんな状態なら、祭り自体が中止になるのでは？」

男の口ぶりでは、祭りは執り行われるらしいが、このような状態になってまで続けることができるのか、疑問だった。

「祭りに意味がないのであれば、中止にしても問題はありません。

ですが、意味があります。……申し訳ない。今、神官の一人が近づいてきています。説明だけ先にさせてください」

男は、にこやかな顔つきは崩さず、早口になる。

「この大祭で選ばれた子どもたちには、あのペンダントで印がつけられます。ペンダントそのものは、二年ほどすると壊れてしまうものですが、その間、子どもたちは生気を吸い取られます」

ダグラスは目を見開く。男は小さく肯いて続けた。

「それは、ほんの僅かなもので、子どもたちの生活には大きく影響しません。また、ペンダントが壊れてからは何事もなく暮らせるようです。私たちは、別の地の大祭からそう結論付けました」

「何故、判ったと…？」

子どもたちの生活に大きく影響しないのなら、不思議に思うわけがない。

男は大きく肯いた。

「あのペンダントを持っていると、ほんの少し良いことが起き易くなります。……そうですね。籤に当たり易くなったり、欲しいと思

ついていたものが手に入ったり。ほんの僅かなことなので、注意していないと気付きません。が、後で振り返るとなんとなく良かったと思える程度には、良くなっています。だから、そういったウワサを知っている人は、病弱なわが子に、と健康な子どもを代役に立てることがあります」

「……その子どもが、体調を崩すことが多い、と」
「……ええ」

男は少しの間の後、強い口調で肯定した。それから、話を続ける。「ペンダントを渡される時には他の人には渡さないようにと、しっかりと言われますが……」

ダグラスは、神官は今どいあたりにいるのかが気になった。

「大丈夫です。今、その角を曲がったようです。まだ時間はあります」

男はにこりと笑った。どうやら、なんらかの方法で連絡を受けているらしい。

「ここからが本題です。……ジャックくんには、そのペンダントを受け取っていただきたいのですそして、それを私に譲っていただきたいのです」

「何のために？」

「不幸な子どもを減らすために」

「失礼ですが、もしやお子さんは……」

「ええ」

ジャックは目を見開いた。男はそれを少し哀し気な目でみつめ、どうですか、と返事を促した。

彼は、ダグラスを見た。もともと、祈りの子どもなどに選ばれようとは思ってもいかなかったから、ペンダントを渡すくらいはどうでもいい話だ。だが、男の話を信用して良いのか、と不安になった。

「自分で決める。大丈夫だ、その結論を俺は応援する」

ダグラスは、不安そうな眼差しの少年の背中をポンと叩く。

「なんだよ、他人事かよ、おっさんは」

決められないから意見を訊きたかったんじゃないか、とジャックは唇を尖らす。

「他人事だよ。残念ながらね。でも、それはそうだろう？　ここで意見が言えるほど、俺だって判つちやいなんだからさ」

つまり、ダグラス自身にも、男の言葉を信じて良いのか判らない、ということだ。

ジャックは素直に直感を信じることにした。

不安なのは、男に対しての情報が無いからだ。同じことをダグラスが言ったのなら、信じるだろう。それは、ダグラスがそういうことで嘘を言うような人間では無いと知っているからだ。

ならば、ダグラスよりも長い時間一緒にいる自分が判断するしかない。

「判りました」

じつと男の目を見て返事をする、男は安堵したように表情を緩めた。

「ありがとうございます。では、後で」

男が礼を言うのと、隣の席の二人が立つのは同時だった。さりげなくそちらに目を向けると、神官が一人こちらに向かってきているのが見えた。

「この場合は、私が払っておきますよ。ジャックを助けてくれた礼です」

ダグラスは、途中の話などなかったかのように、朗らかに言った。

「いえ、そんな。困った時はお互いさですよ」

それに対する男の態度も同じものだ。

「でも、もう気をつけてくださいね。ジャックくんも」

「うん」

元気に肯くジャックに手を振って男が去っていく。

そして、それと入れ替わるように神官はやって来たのだった。

二人は宿への向かって歩いていった。

爆発の後から徐々に下火になってきた賑わいも、日付が変わった頃には、落ち着いていた。

街を照らす灯かりも減り、視界も狭くなってきていた。

それでも、普段の同じ時刻よりは随分と人が多い。街で暮らした八年間を思い出し、ダグラスは不思議な気持ちで行き交う人を見ていた。

「なあ、あれで良かったのかな」

ぼつりと呟くようにジャックが言った。

あれで、というのは、男にペンダントを渡したことについてだろ
う。

「良かったんじゃないか？」

ダグラスは、出来るだけ軽く言う。誰にも正解など判らない。

「ちえ。気軽に言いやがる」

「そりゃ、他人事だからさ」

ジャックが睨んでくるのを感じながら、ダグラスは、でも、と続ける。

「俺も同じことをしたと思うよ」

神官は、男が去るとすぐに寄ってきて、やけに馴れ馴れしい調子でジャックの手をとった。小太りの男だった。そして、祈りの子どもに選ばれたこと、爆発があつたためいつものように公園広場で儀式が執り行えないこと、だが、例年通り祈りの子どもにはペンダントを渡すこと、他者に譲り渡してはならないことなどを告げて去って行った。ジャックはとりあえず喜んで見せ、せかせかと立ち上がる神官に頭を下げた。

しばらくすると、男がどこからともなく現れた。

ペンダントは持っているのもなんだか気持ち悪いので、すぐに渡

そうとすると、男は午前〇時までには、と断ってきた。残り三十分ほどだが、待つ時間よりも、儀式の時間に持っていたくないという気持ちが強かったジャックは正直に嫌そうな顔をした。それを見て、男が困ったように笑う。

「儀式前の譲渡でも、多分問題は無いと思うのだけど、念を入れて条件を同じにしたいんだよ」

仕方ないので、残り時間を他愛も無い会話で費やし、とっとと渡してしまった。

伝えたいことはすべて伝えたからか、目的のものが手に入ることが確実になったからか、男は祭りのことも、ペンダントのことも一切触れず、マックスを褒め、後学のためにとどういう具合に飼っているかを訊き、午前〇時を一分ほど過ぎたところでジャックからペンダントを受け取り去っていった。

今はその帰り道だ。

思いのほか長時間にわたってしまったことで、パーティのことが少しばかり気がかりだった。他に用事が無ければよい…と考え、現在の時刻を思い出し、溜息をつく。

「なんだよ」

不機嫌なジャックの声に、ダグラスは「いや」と苦笑を漏らす。

「ジェインとパーティを随分と待たせてしまったと思ってるさ」

そう答えるとジャックは「う」と口をつぐむ。

「いや、そういう意味じゃないさ。いくらなんでも、こんな時間に若い女性を一人で帰すのも問題だってほう。起きてしまったことをとやかく言っただって仕方ないだろう？ それに、流されてしまった件については、俺も同罪だ」

それでも、自分を責めているような顔つきのジャックの後ろ頭をぼんとはたく。気にするなと言っても、そう簡単に気持ちの切り替えができるわけもない。

「ま、パーティについてはどうにか考えるさ」

大祭のためにどこも宿は一杯だ。彼らも探して三軒目によろやく

偶然空いた部屋を借りられたくらいだ。パーティのためにどこかひと部屋を用意することは難しいだろう。

そんなことをつらつらと考えていると、ジャックが「あ、そうかと呟いた。」

「なんだ？」

訊ねるとじつと見上げてくる。なかなか話しはじめないので不審に思いだしたところで、視線を逸らされた。

「宿に帰ってから話そうと思ってただけ、屋根の上を走っている女の人を見た」

「は？」

唐突な話について行けず思わず聞き返す。

「爆発が起きたあと、流されないように壁に張り付いてたんだ。そうしたら、通りの向こうの建物の屋根の上を、金髪の女の人が走って行った。あれ、何だったのかな……」

金髪の女の人、屋根の上を走る、というキーワードで思い出すのは一人しかいない。そして、その人物の名前を出さないこともここではおそらく正しい。自分たちが気付かないだけで、誰かがそのあたりの暗闇に潜んでいて耳をそばだてても判らないからだ。だが、その正しい行動をジャックがとっていることが疑問だ。

ジャックは決して理解力の弱い少年ではない。ただ、如何せん幼い。ジェインと同じ十歳の少年に、言って良い時と場所と場合を考えると、言っても、経験値が足りなさすぎる。……だが、今、何故そんな判断ができた……？

「あ、それでさ。そのちよつと後に、どっかで立ち話している声が聞こえてきたんだ。なんかね、その女の人のことを『殻』って呼んでたんだ」

「カラ？」

「うん。卵の殻の」

それでも意味は判らない。

「捕獲するって聞こえてきた」

ジャックは無邪気なふりをして首を傾げて見上げくる。わけ判らないよな、と楽しそうに笑う。

「ああ、わけ判らん」

ダグラスは平生を装って相槌を打った。

アリシアを卵の殻と呼ぶ連中がいて、捕獲しようとしている。

ジャックがいきなりこんなところで話し始めた理由がようやく判った。彼が警戒しているのは、ジェインと留守番をしているパーティだ。事情を知らない彼女は、部外者だ。その彼女に話して良いことかどうか、ジャックには判断できない。とはいえ、何がしかの関係者であるアリシアの情報をパーティがいなくなるまで黙ってはもらえない。自分たちと関係があると知られれば、捕獲しようとしているその何者かが、何かしてくるかもしれない。…などと考えたようだ。「なんか面白いからもっと近寄って聞こうと思ったたらおっさんが丁度来てさ」

「なんだ、俺のせいかな？」

「そう。おっさんのせい」

一生懸命考えたらしいが、そこはやはり子どもだと思ってしまう、ダグラスは笑う。

「まあ、聞かなくてよかったんじゃないか？ そいつらにとってヤバイ話を聞いてたら、今ごろ命が無いかもしれん」

もし誰かがこの会話を聞いていたら、聞かれたくないことを聞かれてしまったと勘違いする可能性はある。

それに気付いたのか、ジャックはわずかに顔をこわばらせた。

「大丈夫だろ」

ぼん、と後ろ頭をはたいて、気にするな、と伝えると、ジャックは「いってえ」と顔をしかめてわざとらしく後頭部を手でさすった。

宿への裏通りに曲がったところで、いきなり何かにつつかった。転びかけたのをなんとか踏みとどまっていると、「ああ、あなたたち！」と聞いたことある声がした。よく見ると、街灯の明かりにうつすらと見える顔は先ほどの神官だ。他に数人、同じような神官の服装をした者たちがいる。

「ああ、さっきの」

ジャックに緊張が走るのに気付いて、ダグラスは、肩に手を置いてやる。

「どうかされたんですか？」

どこか慌てた様子の彼らに、逆に訊いてみる。おかしいのは、様子だけではない。神殿から離れた場所にこんな時間に複数人であることそのものがおかしい気がする。

「いえ、人を探してましてね」

少しふつくらとしたその神官は、何事もなかったようににっこりと微笑む。存外タヌキだと、ダグラスは思う。

「このあたりで見ませんでしたか？」

「……どんな人ですか？ 私たちと同じように歩いている人たちは何人かいましたから、特徴のある人なら覚えているかもしれない」
言ってから、ダグラスは、苦笑するように「通りの向こうを歩いている人はただの影にしか見えませんでしたけど」とつけ加える。

「ああ、そうですね。……長い髪の女です。金髪の
「金髪の長い髪…それは、一目でも見たら忘れなさそうな印象ですね」

少なくとも、見た記憶はない。ダグラスは苦笑してみせて、肩をすくめた。

「残念だが、そういう女性は記憶に残ってないですね」

ダグラスはそこでジャックを見下ろした。

「おまえは？」

「気付かなかったけど」

きよとん、と見上げる表情はなかなかの役者だ。

「そうですか。これだけ暗ければ見え難いですから、仕方のないことです。……ありがとうございます」

神官はさも残念そうに言うと、少し振り返り待っている数人に肯いてみせた。

「では、先を急ぎますので。これで」

「ええ。見つかるといいですね」

気遣うように声をかけると、神官は苦笑してみせた。

「ありがとうございます。……ジャックくんも、ありがとうございます。君にとつてよい一年間になりますように」

横を通り過ぎる時、神官は思い出したように足を止め、ジャックに声をかけた。少年がにつこりと肯くと、会釈をして走り去る。その後はもう彼らは振り返らなかった。

「将来は詐欺師にでもなるつもりか？」

姿が暗闇に溶け、足音が聞こえなくなるのを待ち、ダグラスは声をかけた。

「何の話だよ、おっさん。既に詐欺師なヤツに言われたくないね」

「素直なよい子だったのになあ……」

あからさまな溜息をついて見せると、ジャックは頬を膨らます。

「仕方ないだろ！」

「まあなー」

軽く言つて、背中を押しして歩くように促す。

「ねえ、あのさ」

数歩あるいたところで、聞いたことのない声が出た。足をとめて、声のした方を向くと、少年がにつこり笑って立っていた。

「僕的にはちょっと面白い話だったんだけど、あの人たちを呼び戻していい？」

いっそ無邪気ともとれる笑顔と口調で少年は言う。

「金髪の女の人がいるぞーって叫べば聞こえるよね、まだ」

「なんのために？」

ダグラスは表情を消してその少年の様子をうかがう。

暗い夜道でも判るほどに汚れたシャツに、サスペンダー付きのズボンは七部丈。足元はよれよれの革靴。全体的に粗末なものを身につけてはいるが、それが似合っていない。

「僕をしばらくかくまってよ。そうしたら、黙っていてあげるよ」

ただ立っているだけなのに、気品みたいなものを感じさせる物腰だ。

「困ったときはお互い様、なんだよね？」

使い方を間違っている、とダグラスは心の底から思った。

思ったがしかし、彼は次の瞬間肯いていた。

ダグラスが出ていってから、随分と時間が経った。

すぐに戻ってくるとは思ってはいなかったので、パーティと二人おしゃべりをしてきた。だが、三時間経っても戻ってこないければ、不安も膨らんでくる。これが何でもない時ならばそんなこともないだろうが、今はひっそりと身を隠しているような状況だ。お互いなんとなく気を使いあって、帰ってこない不安を口にしないようにしていたが、もう限界だったらしい。

ふっと会話が途切れたときに気も緩んでしまったのが、ジェインは思わず言ってしまった。

「遅い、ですね」

足音のしない部屋の外を見るように、一つしかない入り口を見つめて。

「本当に」

その声に応えたパーティの声が少し怒っているように聞こえて、ジェインは反射的に彼女の顔を見つめた。

声に出したら表情にも表れてしまったようで、不満の色を露わにしている。

「もう十二時よ!?! いくら何でも遅すぎると思わない?! いくら女の子同士だからって、三時間も話せば一段落つくってものよ!

お茶だって飲みすぎて、お腹はガポガポよ!」

ねえ?! と同意を求められて、ジェインは思わず肯いた。

「信じられない! そりゃあ、一旦出てしまえばなかなか連絡がとれないのも判るけど!」

「……あの、ごめんなさい」

考えてみれば、こんな夜遅い時間まで付き合わせているのだ。

「そつという話じゃないのよ!」

ピシッと指をさして彼女は言い切る。なんだか火に油を注いでし

まったようだ。

「あのね、ジェイン。あなたはきつと私がこんな遅い時間まで一緒にいてくれて……とかって思っているのだと思うけど、怒っているのはそこじゃないの!」

もちろん判ってはいるが、そう言い出せる雰囲気ではないので、とにかく返事代わりに肯いてみせる。

「あの人はね、身内に甘えてるのよ!」

あれ? とジェインは思う。ダグラスが身内に甘えていることで、パティは怒っている? そして、ダグラスが身内に甘えている……? 「だってそうでしょう! 屋台によって堰き止められたのは、絶対に彼も見ているのよ。そして私たちが見てただろうってことも理解してるはず。そんな状況で待っているほうが不安にならないはずがないじゃないの。それなのに、連絡の一つもよこさないのよ!」

どん、とテーブルを叩く。

「本来なら、二時間になる前に、連絡を寄越すべきなのよ」

「あの、でも、方法がなかったんじゃない?」

「方法も考えずに出たのなら、なおさらバカだわ」

「でも、ジャックが見つからなくて」

「それだったら、とつと一回帰ってくるわね。人も少なくなってきたいるんだし、できない話ではないわよ」

「じゃあ、ほかになにか……」

フォローするつもりがあるわけでもないが、なんとなく一方的に責められるのは不憫な気がして、ジェインは思いつく可能性を挙げていく。と、最後まで言うまえにパティに睨まれた。

「突発的な何かがあったのなら、なおさら、連絡を入れるものなのよ」

きつぱりと言い切って、パティは、つまり、と続ける。

「急いで連絡をよこさなければならぬような事態にはなっていないから、ずるずると時間を使っているのよ!」

「……………」

これはもしかして、八つ当たりなのかな。

ジェインは、なんとなくそんなふうに思う。

パティが興奮しているせいか、ジェインは妙に冷静な気持ちでその様子を眺めていた。

だから、彼女が出した結論のほかにも、可能性があることに気付いていた。

例えば、連絡を寄越したくても、誰かがいて出来ない、とか。

例えば……と、今度は悪い方に考えて、ジェインはその考えを消した。消してから、パティがいきなり怒り出した理由に思い当たった。

不安、なんだ…。

だから、ジェインはにっこりと微笑んでみせた。

「甘えてもらえるのなら、嬉しいな」

呟くように言った言葉は、彼女の耳にも届いたようだった。

ありえない言葉を聞いたような顔をして、じっとジェインをみつめてくる。

「……え？」

「ジェイン、今、何て言ったの？」

真剣な、怒っているともとれる表情のまま、ぐい、と迫ってくる。

「甘えてもらえるのなら、嬉しい……って」

「理由を聞いても？」

ぐい、とさらに迫ってくる。

「え、ええと……。ダグラスさん、うちに住んで一か月くらい経つのに、すごく遠慮してて……」

さらに、ぐい、と迫り、続きを促す。

「ジャックみたいに何でも言うとかじゃなくても、気を使わずに楽しんでもいいのにな」

それを聞いて、パティは力を抜くように息を吐いて、表情を緩め、ジェインから身を離れた。

妙な圧迫感を感じていたジェインはそこで、ほっと一息つく。と、

ぼんぼん、と頭の上に手を載せられた。

「いい子ね、ジェイン」

「え？」

「なんで、こんないい子があんな男を……」

ぶつぶつ言いながら、ドアのほうを睨みつつ、ぼんぼんと頭を軽くはたく。

「あ、あの。パティさん……？」

はたかれ続けている頭は決して痛くはないのだが、なにやらおもちゃにされているようで、微妙な心地がする。

「あ、ごめんね」

気付いてはたくのをやめた彼女は、困ったような顔をして少し笑った。

「それから、八つ当たりしてごめんなさい」

ジェインは慌てて首を横に振る。

悪い方に考えないように。

おそらく、そんな考えのもとに、ダグラスを悪者にしたのは想像できたので。

「それからね。これは、人生のちょっとだけ先輩からのアドバイスね」

別に、ライバルを蹴落とそうとしているんじゃないのよ？ と前置きして。

「悪いことは言わないから、ジャックくんにしときなさい。絶対に、彼の方がいい男になるわよ」

ジェインは何と返答をしてよいか判らず、ただただパティを見上げていた。

どうして、年齢差のことで笑わないのか、子どもの憧れだと決めつけないのか。

どうして、ジャックのほうがいい男になるのか。

とか、疑問に思うことがいくつもあり、それらが頭の中で渦巻いて言葉にならない。

言葉にならないまま、パティのことを見ていた。

と、足音が聞こえて、ドアが開いた。

「やっと帰ってきた」

先頭に見えるのはジャックで、その後ろにダグラス。と想像していたら、ジャックとダグラスの間に栗色の髪をした少年がいた。

「……その子、誰？」

パティが眉根を寄せて問うと、ダグラスはそうだろうそうだろう、と言うように数回肯く。

少年は、ひよい、とジャックの後ろから顔を覗かせてにっこり笑ってみせた。

「こんにちは！ 僕のことはいーって呼んでよ」

デー……と、ジェインは心の中で何度か呟く。祖父の名前と似ているので、混乱しそうだと思う。

「デーくんね。それで、何者、なのよ」

パティは腕組をして見下ろす。

デーはちよつとだけ目を大きくしてから、胡散臭い笑顔を浮かべた。

「実は僕、家出少年なんだ。だから、見つかると困るから匿ってもらえるよう、二人にお願いしたんだよ」

自分で「家で少年」なんて言うのかな、とジェインは思う。ジャックとダグラスを見れば似たような感想を持ったと判る表情をしていて、デーの胡散臭さに拍車がかかった。

「お願い、ねえ…」

パティは呟くように言うと、ディーに負けず劣らずの笑顔になった。

「よほど頼みを聞きたくなるようなステキな関係、ってことよね」

「うん。おねーさんよりは親密な関係だと思っよ。ね、ジャック」

ぼんと肩に乗せられた手を心底いやそうに眺めるジャックの返事も待たず、ディーはにこつと笑って言葉を続ける。

「でも、せつかくだから、おねーさんとも仲良くなりたくないなあ。ねえ、さっきのことを話してもいい？」

パティは溜息を吐いた。

「先輩、私これで失礼しますね。また何かあつたら連絡をください」
そして、何事もなかったかのような笑顔で言う。

「あのね、少年。何もかもを共有することが仲がいいってことじゃないのよ？」

「知ってますよ？ それくらい」

言われたディーも涼しげな表情で返す。

「イヤガラセにしてはよろしくない方法だったこと。じゃあね」

ひらひらと手を振り、パティは荷物を持ってドアへ向かった。

ドアを開ける前に、追いかけてようとするダグラスに「家は近いし、今日は明るいから大丈夫！」と言うのを忘れない。

「悪いね。この借りはいつか返すから」

すまなそうに言う彼に、小さく微笑んでみせる。

「先輩。話せないことがあるのは判ってるんです。それを無理に聞こうだなんて、考えてもいません。ここに無理矢理居座って、大切な時間を無駄にするなんて、したくもありません。だから、気にしないでくださいね」

判った、と肯くダグラスに軽く頭を下げ、ジェインとジャックに手を振り、彼女は帰っていった。

「イヤガラセなんかじゃなかったんだけどなあ…」

パタンと閉じられたドアをなんとなく見ていた三人は、その眩きを聞いて、その場にもう一人いたことを思い出した。

「ま、いいや。僕は一応自己紹介すんだよね？ 今度はあなたたちの番だと思うけど？」

家出少年のデイーで、自己紹介が済んだと思えるあたりが腹がたつが、ダグラスは諦めて事故紹介することにした。

「私は、ダグラス。その彼女 ジェインの知り合いだ」

「ダゲ、ね」

うなずいて、今度はジャックを見る。

「ジャック、ジェインの友達」

「ふうん」

「私は、ジェインです。……あの」

「うん？」

「……家出って、どちらから来たのですか？」

閑話1（前書き）

続きを投稿しようと思っていたのですが、体調が思わしくなく、閑話を入れることにしました。

才チなし意味なしのものです、とりあえず。

…書いてあることは、嘘ではないはずです…

閑話 1

この家に居候をはじめて数日経つと、内情が判ってくる。

自分をここに引きずってきた老人デイルと、その孫娘ジェイン、そしてゴールデンレトリバーのマックスがこの家の住人だ。

大型犬どころか、犬と一緒に暮らした経験のないダグラスは、最初はかなり戸惑いを感じた。

マックスは、基本的にジェインにくっついていて、居間で寝そべっている。たまに来る客人にも、首を上げてちらりと見るくらいで、まず動かない。動かないのは他のどんな時と同じで、たとえ通り道に寝そべっていたとしても、どくことはない。

一つ例外があるとすれば、ジェインがどけるよう指示をした時だ。その時ばかりは、当たり前のように立って道を開ける。

ダグラス自身、マックスを跨がざるをえない時は、噛まれるのでは？とドキドキしながらしていたものだった。

マックスは動かないおとなしい犬かと思っていたら、ジェインとボール投げをしている時は澁刺として、居間でひたすらに寝そべっている姿が想像できない程だ。

……つまるどころ、マックスの主人はジェインなのだ。

マックスはジェインに呼ばれると素早く立ち上がり尻尾をゆらゆらと揺らして軽い足取りで行く。

それがデイルでも一応は立ち上がって行くが、ジェインの時とは違い、まず首を少し持ち上げ、しばらく考える素振りを見せてから、よっこらしよと立ち上がる。足取りもゆったりとしていて、尻尾は振られない。

ようやく犬との生活に慣れてくると、今まで聞いたことのある、犬はボスに従うという話と、随分と違うということに気付いた。そのことをデイルに訊いてみると、彼は面白そうにニヤリと笑う。

「そりゃ、随分古い考え方だな」

「そうなんですか？」

聞き返すとうなずく。

「犬の祖先は狼で、狼は群を作り、群のボスに従うから、犬にもその傾向がある、ってヤツだろう？」

「そうです」

「一理はあるが、全てではない、ってのがその後に出てきたはずだが」

「それはつまり、ジェインとマックスみたいなのも普通である、ということですか？」

「そう。確かに犬は順位を重んじることもある。そういう犬もいるし、そうでない犬もいるということだな。そうでないと言っても、群のボスの言うことを聞かないわけじゃない。ただ、自ら、順位にこだわり、ボスになろうとしないだけだな。マックスの場合、あきらかに、こちらのパターンだ。ヤツはジェインに拾われて可愛がられ、遊んでもらい、食べものも与えられている。自分にとって、一番の喜びを与えてくれるのがジェインだと判っているんだよ」

「だから、ジェインのことをよく聞く、と」

デイルは小さくうなずく。

「人間も同じだろう？ちゃんと認められて褒められると嬉しいが、見当違いな褒め方をされても胡散臭いだけだ」

「なるほど」

上司と自分を思い出すと、なんとなく判ってくる。

「ジェインは何気なくつきあっているように見せて、実はマックスの動きや表情にかなり敏感に反応して、褒めたり、たしなめたりしている。そこが一番大きな差なのだろうな」

よく判らなくて説明を促すと、デイルが言うには、ジェインがマックスの側にいる時は、マックスが良い行動をとろうとした時にはニコリと微笑み、悪い行動をとろうとした時には顔をしかめたりもしているらしい。

要するに、会話意外の表情で、意思を伝えあっていると云うのだ。

だとすれば、マックスは的確に褒められ、的確に叱られているということになる。それは、「キミのことを理解しているよ」というサインだ。

人に置き換えるなら、なつかない方がおかしい。

「ボスの考え方は間違いではないが、絶対的な力で支配するだけが「ボス」

のありかたではない、ということだな」

そして、説明は終わったと、研究室に引っ込んだ。

取り残されたダグラスは先ほどの言葉と、マックスの行動とかさなる部分を頭に浮かべ、理解できたような、出来なかつたような、不思議な顔つきをしていたのだった。

閑話 2

デイルの家に居候し始めて、ダグラスが一番驚いたのは、その快適さだ。

街から一時間以上も車を走らせてようやく辿り着くような場所で、ガス、水道が使えるのだ。

酔いつぶれて気がついたら見知らぬ家にいたことに彼は驚いたが、最初のうちは街のどこかの家だと思っていた。そのわりに、やけに空気が澄んでいる、とは感じていたが、室内しか移動しなかったのが気付かなかつたのだ。二日酔いで、自分がどこにいるという疑問にまで頭が回らなかつたというのもある。

階段を降りていくと、すぐ横の炊事場で甲斐甲斐しく働く少女が一人。同時に昨晚一緒に飲んでいた老人の顔を思い出す。孫と二人暮らしと言っていたか。

「あ……おはようございます」

と、少し慌てたように小さな声で挨拶をする少女に、小さく右手を上げて表情と口の動きだけで挨拶を返す。少女は小さく首を傾けて、「お水、飲みますか？」と訊ねてきた。

うなずくと、少女はコップに流しの水道から水を入れて渡してくれる。街では普通、沸騰して冷ました水をポットに入れて、それを飲むようにしているが、子どもは知らないらしい。そんな感想を抱きつつも水を口に含むと、あまりの美味さに目を瞠った。

「……どうか、しましたか？」

心配そうに言う少女に小さく首を振ってみせる。単に、大きく振れないだけなのだ。

「いや……。水が美味いね」

そう言つと、少女は嬉しそうに微笑んだ。そして、少しすまなそうな表情になる。

「あの、おじいちゃん、まだ寝てるんです。多分、もう一時間くら

いすると起きてくると思っんですが」

少女が視線を向けた先には時計があり、まだ七時にもなっていないことを知る。一緒に飲んで自分を連れ帰って、一時間後には起きてくるというのが、なかなか驚異的だ。

だが、彼はその驚きはかくして、右手を上げた。

「いや、大丈夫。一人で帰れるから」

言ったとたんに心配そうな顔をした少女に、水をありがとう、と告げ、のろのろと玄関と思しきドアに向かい、開け、彼はその動きを止めた。

……見えるのは、山の斜面。…草の生い茂った丘。一軒の家も見えない。

「ここは、どこだ？」

「あの」

焦った声を発しながら炊事場から小走りに近寄ってくる少女を振り返る。

「ここは、どこだ？」

昨晩までは、街の飲み屋にいたはずだ。街からこんなところまでくるには、どれくらい移動したらいいのか。

少女が告げた場所は、彼の知らないところだったが、後の説明で街までは車で一時間以上かかると知らされ途方に暮れる。

「ごめんなさい」

謝る少女に疑問の眼差しを送ると、よくあることなだと告げられる。どうやら、少女の祖父は、街で知り合った人間をよく連れて帰るらしい。道理で、少女はやけに慣れていると思った。

そして、水の美味さにも、納得した。

納得して、更に驚いた。あの水道は何だ、普通は井戸ではないか、と訊ねると祖父がそのテの細工が得意なのだという。ついでにガスコンロも紹介され、そういえば目の端に映っていたことを思い出す。水道とガスコンロが見えていたから、街中だと疑いもしなかったことに思い至る。

聞けば、この辺りに住んでいる家では、この祖父の細工が大活躍しているらしい。この辺りと言っても、十数件で、それぞれ山を一つ越えたようなところにあるらしいのだが。

そこで少女は一つの宿屋の名前を告げた。それを聞いて納得をする。景色と料理で有名なその宿屋のもう一つの売りは、その快適さなのだ。街中での快適さに慣れた人々は、捻れば水が出てくる水道……つまり、シャワーが使える環境に魅力を感じるのだ。その宿屋が、この家から一番近い「ご近所」なのだと言う。そして、早く戻ったほうがよければ、その宿屋の家に少女の友人がいて彼が街まで送ってくれると言う。その時間を問えば、無線の「電話」があり、早ければ二十分もすればこの家に着くとのこと。

水道、ガスときて、無線だ。ダグラスは半ば呆れながら少女の話を書き。

無線など、ダグラスの住む街でも普及してはいない。

その様子に気付いたのか、少女は慌てて口元を両手で押さえた。

「……もしかして、言うなと言われていた？」

問ってみれば、少女は肯く。つまり、彼女の祖父は、それなりの知識を持った人物だということだ。

いろいろ興味は尽きないが、彼は詮索するつもりはない。

「大丈夫、黙っているよ。…だから、おじいさんが起きるのを待たせてもらっていいかな？」

微笑んで言うと、少女は安心したように小さく微笑んで肯いたのだった。

そして、やがて起きてきたディルに街まで送られ、飲み直し、同じように二日酔いで目が覚めたのがこの家だったのが、居候の始まりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3522t/>

水晶魚【すいしょううお】

2011年10月13日01時50分発行